文部科学省
大学教育再生加速プログラム(AP)
テーマⅣ

長期学外学修プログラム
事業報告書

(平成27年度～令和元年度)

令和元年度報告書

文化学園大学
Bunka Gakuen University

文部科学省大学教育再生加速プログラム（ＡＰ）
テーマⅣ　長期学外学修プログラム（ギャップイヤー）報告書発刊にあたり

ご挨拶

長期学外学修プログラムは令和元年度をもって5年間の事業を終了いたしました。この度、平成27年度から令和元年度の5年間の事業活動を報告書にまとめました。

本学では、建学の精神である「新しい美と文化の創造」のもと、国内のみならずグローバルにファッション分野で活躍できる人材育成をめざしております。本学での「長期学外学修プログラム」は、国内・海外での長期学外研修を通じて主体性や行動力を身につけ、グローバルコミュニケーション力、異文化交流や伝統・文化理解力、グローバルキャリア志向を高めて、「グローバル創造力」を養成することが目的です。

本学ではプログラム実施にあたり、2月から3月にかけての期間に「梅春学期」を新設し、1・2年生を対象に科目を実施いたしました。本事業は、平成27年度の準備期間、平成28年度の試験的実施を経て、平成29年度の本格的実施より3年間にわたり内容を拡大・充実して展開してまいりました。低学年次に長期間にわたり海外での異文化体験や国内企業での研修体験をすることで、早い段階で社会に求められる主体性などの能力を身につける、あるいは様々な気づきを得て、その後の大学生活やキャリアデザイン志向に役立てるものです。

学修成果については本報告書に記載されております通り、学生は多くのものを学び、得難い貴重な体験をできたこと、そしてこれからの大学生活やキャリア設計目標が明確になったことを報告しております。本事業に取り込んだことで、学生が様々な「気づき」を得て当初の目的通りの学修成果を上げることができたと実感しております。

これからも、本学としてこのプログラムを継続し、学生へのチャレンジ教育プログラムとして充実を図ってまいりたいと考えております。

最後に、本プログラム実施に当たり、ご協力、ご支援いただいた様々な企業、自治体や教育機関の皆様に、心より御礼申し上げます。

令和 2年10月

文化学園大学
理事長・学長
濱田　勝宏

目次 CONTENTS

ご挨拶 ……P.1

目次……P.2

第１章　本事業の概要

1.本事業の概要……P.4

2.教育改革の取り組み ……P.6

3.事業の推進体制……P.8

第２章　「梅春学期」プログラム概要

1.「梅春学期」の概要 ……P.10

2.「梅春学期」年次別事業一覧 ……P.11

第３章 本事業の評価と成果

1.学内評価体制 ……P.12

2.ルーブリック評価 ……P.13

3.プログラムの成果 ……P.15

4.教育効果の検証 ……P.17

(1)教育効果の検証①―
梅春科目の履修が３・４年次の成績に
及ぼす効果

(2)教育効果の検証②―
履修学生へのインタビュー

5.学外評価体制 ……P.19

(1)「ファッションビジネス学会報告事例」

(2)「APプログラム成果報告会」の開催

(3)「APプログラムテーマⅣ
合同総括シンポジウム」

(4)「報告書配布による学内外からの評価」

(5)「国際シンポジウム」開催

(6)「ファッション系教育における
グローバル人材育成――プログラム
報告とパネルディスカッション」

6.本事業の成果と波及効果……P.22

7.本事業の総括――今後の展望と課題
……P.23

第４章 令和元年度報告書……P.25

国内プログラム

＜梅春＞和紙と漆でものづくり2019（飯山）
……P.26

＜梅春＞メンズファッション（東京・岩手）
……P.29

＜梅春＞ファクトリーブランド（東京・山梨）
……P.32

＜梅春＞カットソーの製造現場（東京・山形）
……P.35

＜梅春＞染めによる着物デザイン（新潟）
……P.38

＜梅春＞素材からの商品企画（東京・新潟）
……P.42

＜梅春＞ハイブランドの製造現場（東京）
……P.46

＜梅春＞ファッション企業研修（東京）
……P.49

＜梅春＞テキスタイルの製造体験（東京）
……P.52

海外プログラム

＜梅春＞ハワイ研修
……P.55

＜梅春＞シドニー・メルボルン研修
……P.57

＜梅春＞ブリスベン研修
……P.61

＜梅春＞ニューヨーク研修
……P.65

＜梅春＞シンガポール・インドネシア研修
……P.68

グローバルファッションマネジメント実習
…… P.72

第１章　本事業の概要

1. 本事業の概要

本事業は、ファッション教育分野における「長期学外学修プログラム」である。本学は、「新しい美と文化の創造」を見学の精神とし、日本国内にとどまらずグローバルに活躍できる人材の育成を目指している。ファッション・クリエイティブ分野においてグローバル化に対応できる人材育成は、喫緊の課題でもある。

学校法人文化学園は、中期計画において「グローバリゼーション」「クリエイション」「イノベーション」の3つの柱を教育・研究活動の基本方針として掲げており、本学の長期学外学修プログラム（AP）事業（以下「本事業」という。）は、本学における「グローバリゼーション」推進の一端を担う事業として位置付けられた。

本事業の長期学修を可能にする為、後期定期試験終了後から春期休暇中の期間に、1・2年次生を対象に「梅春学期」を新設した。また、3年次のグローバルファッションマネジメントコース対象の8週間～12週間の海外・国内インターンシップ実習も組入れて実施した本事業の目的は、学外学修プログラムを通して、学生が主体性や行動力を身に付け、グローバルコミュニケーション力、異文化交流や伝統文化理解力、グローバルキャリア志向力を高めて、「グローバル創造力」を養成することを目指すものである。

取組期間は、平成27年度から補助期間終了の令和元年度までの5年間であった。平成27年度は、海外提携校との折衝、受入企業開拓を行い、平成28年度は、試験的期間として海外1か所、国内2地域2企業で実施した。平成29年度は、「本格的実施年度」と位置付け、海外5科目、国内10科目開講し、また、海外インターンシッププログラムではファッションマーケティング分野の学生対象のプログラムと、ファッションデザイン分野の学生対象のプログラムを新たに開講し、質量共に充実を図り、83名の学生が参加した。平成30年度は、国内9科目、海外4科目で実施し、66名の学生が参加した。科目の内容は、終了後に振り返り、成果評価を行い、内容変更や新科目を導入して参加学生増加の施策を試みてきた。最終年度の令和元年度は、国内9科目、海外5科目で実施して77名が参加した。

参加学生数割合は、目標を下回っているが、梅春科目は長期間にわたり海外・国内の企業や教育機関で実習を伴う科目のため、担当教員が事前に面接を行い、適性や意欲、語学能力等を確認して参加学生を絞り込んでいることも要因の一つである。結果として、目的意識の高い、意欲的な学生の参加が多かったことも事実である。

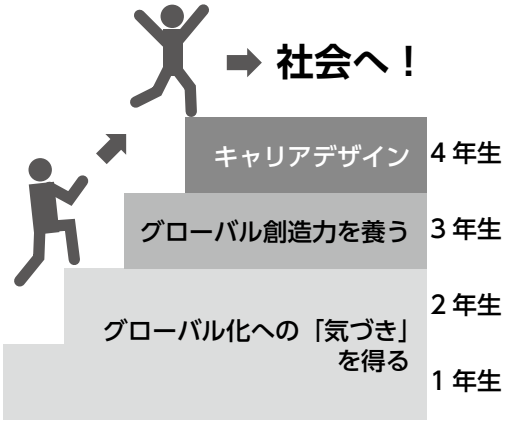
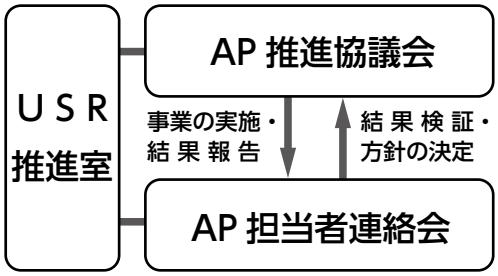
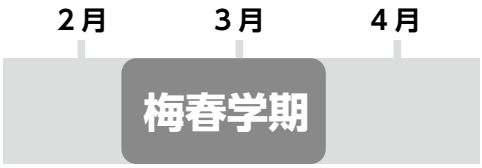
科目の実施に当たり、担当教員と学生が事前教育で、ルーブリック評価基準、目標設定や達成に向けたプロセスチェックを確認し、事後教育で振り返りと報告書の作成、発表を行っている。報告書では、多くの学生が学内の授業では学べない貴重な体験を語っている。国内モノづくりの現場でプロフェッショナルの仕事を学び、あるいは海外企業体験、教育機関での交流等の体験を通じて、自身の足りない部分や高学年でやるべき目標が意識できた、グローバル化対応の必要性など、さまざまな「気づき」を得られたことは本事業の大きな成果である。令和元年5月に開催した本事業の公開成果報告会で、海外・国内科目参加学生が成果発表を行った。学生たちが、力強く学修成果を発表していたことは印象的であった。さらに、参加された学内・学外一般の方々へ本事業を認識頂き、成果を評価いただく機会にもなった。

以上、本事業は1年次及び2年次を中心に梅春学期として集中的な学外学習体験プログラムを提供し、3年次における専門的な学外学修プログラムに役立てて、結果としてファッション分野における「グローバル創造力」を養成できるようにするものである。

＜梅春学期＞の新設とその展開

ファッションの分野では生産拠点の多国籍化や海外マーケットの拡大というグローバル化が進展している。

文化学園大学では、この変化に対応するため**「コミュニケーション力」**と**「伝統・文化理解力」**を培い、**＜グローバル創造力＞**を育成するための長期学外学修プログラムを実施している。

プログラム概念図		・ い つ ？： 1･2年次梅春学期（2～3月） ・どこで？： 日本の伝統文化に関わる企業、海外提携校 ・何をする？： インターンシップ（日本）、講義受講やワークショップ（海外） ・どうなる？： グローバル化という社会環境の変化への「気づき」を得る
実施体制		・学長をトップとし、学部長以下担当教員・事務局幹部で構成される意思決定機関 ・学部長以下担当教員・事務局職員で構成される実行機関
梅春学期とは？		・入学後早期にまとまった中長期的な時間をつくり、かつカリキュラムとして単位化するために、後期試験終了後（2 月中旬）から春期休暇（3 月中旬）までの 1 カ月余を「梅春学期」として新設した。
グローバル創造力とは？		**コミュニケーション力** ・言葉で伝える → 言葉を学ぶ ・デザインで伝える → デザインを学ぶ **伝統・文化理解力** ・日本の伝統・文化を理解する →日本の伝統・文化の中で学ぶ ・異文化を理解する →異文化の中で学ぶ

2. 教育改革の取り組み

学校法人文化学園は、中期計画において「グローバリゼーション」「クリエイション」「イノベーション」を3つの柱として掲げており、本学の長期学外学修プログラム（AP）事業（以下、「本事業」という。）は、本学における「グローバリゼーション」推進の一端を担う事業として位置付けられている。

本学は、創設当時から外国人留学生が多く、常時学生数の10％を超える外国人留学生を擁している。本学の多くの学生が学ぶファッション領域では、今後市場の拡大が望めるのは海外であり、卒業後海外に出て行く要員の養成のためにも、また大学での学修の動機づけのためにも、学部入学後の早い時期に、本事業により、我が国の文化を学び、海外で学ぶ経験を有することは大きな意義があると考えている。

本事業に参加する学生の数は、学生総数の2.9％に留まるが、そうした学生が事業参加後、一緒に授業を受ける外国人留学生や、他の学生と新たな気持ちで交流する中で、他の学生にも波及効果の及ぶこと、そして好循環の生じることが期待される。

本事業は、平成29年度から本格的に実施しているが、国内の学修プログラムに参加した学生の中には、海外留学することを目的として、留学前に我が国の文化を知ることを意図して参加する者も現れており、本事業の趣旨は学生に確実に浸透している。

また、国際シンポジウム及び公開報告会の開催、ファッションビジネス学会での成果発表、報告書の発行など、積極的に学内外への波及を図ったことで、学内教職員の理解はもとより、入学希望者にも認知されるに至った。

本事業に関与する教員は、本事業の趣旨を理解して、その推進に積極的に取り組んでいる。これら教員の間では、海外で本学の学生を受け入れてくれる提携校や、提携校の紹介によるインターン先、国内で本学の学生を受け入れてくれる各種機関との折衝を通じて、また、提携校の学生を受け入れてくれる国内企業を開拓する中で、学外に目を向ける姿勢や、学外の色々な状況や要請に対応する感性が育成されつつあり、こうした姿勢や経験は、今後の産学・地域との連携にも大きく資するものと考えている。

大学全体としても、グローバリゼーションを具体的な形をもって推進しようとする機運が醸成され、教員・職員の採用に当たっては、海外での教育研究経験や就業経験、外国語能力が望ましい条件として認識されつつある。また、学生の外国語能力の向上を全学的な課題とする意識が、教員の間で共有化されてきており、外国語の主体的な学習奨励のため、外部の試験で高得点を得た場合に単位として認める措置を、平成29年度からは、対象とする試験の範囲を広げた上で、全学的に導入された。

本学が本事業に採択され、本事業関係者だけでなく、学内の教職員が各AP拠点校や採択大学での成果発表会の通知を受け、参加するようになったことも、APの対象としている諸課題に関する教職員の意識の高まりに貢献している。本学では、教育の質的保証について検討するため、平成28年度に教職員による検討会を立ち上げたが、この検討会より、学修成果の可視化のため、「ラーニング・ポートフォリオ」が導入された。

また、本事業では、学生の成績評価手法として「ルーブリック」での評価を、本学内では先駆けて導入したが、その効果が確認され現在では全学的に認識されつつあり、また、AO入試の評価手法としても活用している。

なお、令和2年度より、授業時間を従来の90分から100分へ変更し半期14週とした。このことに

よって従来では連続1か月が限度であった学外学修期間を延長することが可能となった。

このように、本学の改革は着実に進められているが、本事業は本学における「グローバリゼーション」推進の一端として位置付けられており、本事業を中核として、次のような総合的な大学改革を進めている。

①カリキュラム改革

令和2年度より、授業時間を従来の90分から100分へ変更し半期14週とした。このことによって従来では連続1か月が限度であった学外学修期間を延長することが可能となり、本事業の趣旨に沿った効果の増大が見込まれる。

外国語科目については、平成28年度より、5学科で入学前教育プログラムに導入した。また、本事業の一環として、海外での語学研修の機会を充実するとともに、平成29年度より、外国語の主体的な学習奨励のため、外部の試験で高得点を得た場合に単位として認める措置を導入した。

「アクティブ・ラーニング」に関しては、入学定員ベースでは本学の78％が実技系の学科であり、カリキュラムの大半が演習・実習で組まれ、日々の課題に加えて、正課としてのファッションショー等を通じて、学生自身が主体的に学ぶ環境にある。比較的講義の多い残る3学科でも、地域や企業との連携プロジェクトや少人数のゼミ等を積極的に取り入れている。

服装学部では、3年間の検討の末、平成30年度の入学生から新たなカリキュラムを導入した。従来のコース制を改め、ファッションクリエイション学科は、学生の将来の志向に合わせて、様々な科目を履修することが可能なフィールド制を採用することにより、各フィールドから自分の将来に必要な科目を主体的に選択し、専門知識を磨きながら視野を拡げる教育が可能となった。また、比較的座学の多いファッション社会学科では、ファッションを中核として7つの領域【商品・ビジネス・人間・社会・グローバル・文化・歴史】を横断的に広く学べるカリキュラムとした。また、低学年から小人数の「基礎ゼミナール」を導入し、「アクティブ・ラーニング」型の授業を通して、大学生活に必要な思考力・観察力・分析力などの基礎力を身に付けさせる教育を行っている。

平成28年度に、教育の質的保証について検討するため、教職員による検討会を立ち上げたが、この検討会の提案により、学修成果の可視化のため、「ラーニング・ポートフォリオ」が導入された。

②出口に関わる改革

キャリア教育に関しては、一貫した人間力の育成とキャリア教育を行うため、正規の授業科目として「キャリ形成教育科目」を1年次から設置し、単位化している。

その中で、服装学部と造形学部では、3年次に「コースセミナー」として校外活動を行ってきたが、その在り方を全面的に見直し、自分の将来像をイメージし、より具体的に卒業後の目標を考えることを主眼としたものへ刷新している。

インターンシップについては、専門分野において一定の知識を身につけた3年次を中心に、専門分野において代表的な企業で2～3週間の就業経験を持ち、自己の思い描いてきた業種・職種の適性を知る機会として、学生の約4分の1が活用しており、多くの学生の参加を得るべく、受け入れ先の確保に努めている。

ディプロマポリシーについては、平成28年度における3つのポリシーの見直しに際し、他のポリシーの基盤として位置づけて最初に検討して、全面的に改定しホームページで公開している。

就職を支援する「就職相談室」については、併設の専門学校である文化服装学院のキャリア支援室と統合し、「学園就職支援室」とした。今までも、年間を通して「就職講座」を開講するなど積極的に活動を行ってきたが、統合したことによりキャリアに関する学園内のリソースや情報を一元管理することが可能となり、より手厚いサポートが可能となった。

3. 事業の推進体制

本事業における学内実施推進体制は次の通りである。本事業は複数の教員が個々にテーマ設定を行い、事業内容が多岐にわたっているため、事業を推進するためには体制の基盤づくりが不可欠であると捉えて、事業の進捗・拡大に併せて、推進体制の整備を推進してきた。

本事業の目的を達成するために、平成27年9月に本事業の議決機関として『AP推進協議会』を設置するとともに、推進・実行機関である「服装学部USR推進室」を「服装学部・現代文化学部USR推進室」に改組して人員を増加し、さらにプログラム担当教員で構成する『AP対応ワーキンググループ』をUSR委員会に設置した。ワーキンググループは個別科目の設計や実施等、教育プログラムの意思決定を担う実行機関として位置付けた。

さらに、本プログラムを科目としての運用の協議、科目の評価基準、内容についての検討を円滑かつ迅速に実施する体制を全学的に整える目的で、本プログラム担当教員と学事課、教務課職員からなる『AP担当者連絡会』をUSR推進室の連携機関として平成29年1月に設置した。この連絡会を設置したことで、プログラムを実施して得られた成果や課題を担当教員と事務職員が共有することができ、今後の円滑な事業拡大の土台を構築できた。

『AP推進協議会』と『AP対応ワーキンググループ』、『AP担当者連絡会』と3つの推進機関が発足・設置されたが、それぞれの機能・役割分担を明確にした。

『AP推進協議会』は、本事業の議決機関であり、教育プログラムの意思決定を円滑に進めることが可能になった。

『AP対応ワーキンググループ』は、本事業を担当する教員の情報交換・共有の場である。プログラム内容について、あるいは事前教育や事後教育の方法の討議、また、複数の教員が共同で事前・事後教育を行うなど、教員同士の有機的なネットワーク機能も有している。

『AP担当者連絡会』は、上述のように事務方職員も加わったことでプログラム科目の運用の協議や科目の評価基準、内容についての検討を円滑かつ迅速に実施する体制が整った。

このように、3つの推進機関が発足・設置されたが、それぞれの機能・役割分担を明確にしたこと、また複数の教員及び事務職員が3つの機関の委員を兼務することで、課題や成果などの情報伝達がもれなく行われる体制を構築できた。

推進体制・組織図は下記のとおりである。

『長期学外学修プログラム AP（ギャップイヤー）推進体制・組織図』

事業推進代表者：濱田　勝宏　　事業推進責任者：服装学部長　永富　彰子

AP推進協議会（APプログラム議決機関）

（委員長）濱田 学長　（副委員長）清木 事務局長　永富 服装学部長

［服装学部］	［現代文化学部］	［造形学部］	［教務部］	［国際交流センター］	［書記］
永富 学部長	石田 学部長	渡邉 学部長	円谷 教務部長	古屋 センター長	学事課 橋本
松田 教授	柴田 教授	白井 教授	二茅 課長	高橋 課長	
須山 教授	河本 教授		高野 課長	Scott Sutcliffe	
横山 教授	工藤 助教				

USR推進室
室長：永富 学部長　副室長：松田 教授
【AP対応ワーキンググループ】（下線文字の教員がWGメンバー）

AP担当者連絡会（AP担当教員・担当事務局員によるプログラム実行機関）

［海外担当教員］	［国内担当教員］	［事務局］	［広報］
横山・須山・田島・深沢・工藤	河本・田島・小林・平良木・亀谷・寺嶋・大橋・鎌倉・若月・金尾	学事課：二茅・山川・橋本 教務課：大橋・黒澤 USR推進室：孟（書記）	工藤・橋本

（活動内容）◇プログラムの円滑な運用を協議、実行　◇科目の評価基準設定 事前教育・事後教育の実施　（敬称略）

このように、3つの機関が役割の中で本プログラムの運営協議、科目評価基準、内容について検討を行い、実施後の得られた成果や課題を検討・精査して次年度のプログラム構築に反映させていく運用体制を確立させることができた。

また、推進体制の人員強化を併せて整備してきた。平成27年11月に本事業の推進体制整備のためファッションマネジメント分野の教員公募を行い、平成28年4月より任期制教員として採用することが決定し、本事業の推進体制を整えた。そして、令和元年度には任期制教員として採用の教員2名を専任教員としての採用を決定した。さらに、海外との折衝を担当できる教員を令和元年度から新たに1名採用することを決定し、実施体制の充実強化を図った。

また、平成27年10月から「服装学部USR推進室」にTOEIC800点以上のスキルを持つ事務スタッフを雇用した。これにより、本事業推進にかかわる事務作業や海外の現地教員らとの連絡、関係部署との折衝などが円滑に行われ、本事業を推進することが可能となった。

【USR推進室の組織拡充】

USR推進室は元々、服装学部所属の「服装学部USR推進室」であったが、平成27年度文部科学省APプログラムテーマⅣに採択され、同年9月にAP推進協議会発足と併せて「服装学部・現代文化学部USR推進室」に改組して人員を増加し、APプログラム担当教員で構成されるAP対応ワーキンググループをUSR推進室内の組織として設置した。

平成29年5月に「服装学部・現代文化学部USR推進室」に造形学部を取り込み、本大学の3学部すべてを包括した「文化学園大学USR推進室」に改組し全学組織へと拡充を行ったことで、全学的な取り組みとして拡大する基盤を拡充できた。そして、本事業の拡大及び補助事業終了後の継続にむけた土台を構築することが可能になった。

第２章　「梅春学期」プログラム概要

1.「梅春学期」の概要

本学は、「長期学外学修プログラム」の実施に当たり、1月末後期試験終了後から春期休暇終了の3月中旬までの機関に1・2年次を対象に「梅春学期」を新設した。3年次の長期

インターンシップ実習も併せて「グローバル創造力」が醸成され、より高い効果がでるような体系的なプログラムである。

しかし、グローバル意識を持ち、「グローバル創造力」を修得しようと勉学に励む学生が多いわけではない。そのため、1・2年次に学修プログラムに参加してグローバル化という社会環境の変化への「気づき」を得ること、さらに、「気づき」で得られた学修目標を3年次の専門課程でより高次の「グローバル創造力」を養い、最終学年でのキャリアデザイン志向力に生かしていくという内容を目標としている。

1・2年次は梅春学期を利用して海外・国内での4週間プログラムである。このプログラムのカリキュラム化については、平成28年度の試験的実施を行った後、グローバル創造力の向上を見極め、カリキュラム化及び単位化に向けて検討が可能となった。平成29年度に服装学部生、現代文化学部生を対象に応募可能なコラボレーション科目としてしての単位化が決定した。このことにより、カリキュラムの学部の壁を取り払い、学生が参加しやすい事業内容とした。

海外学修プログラムは、海外提携校での授業体験や学生とのワークショップ、語学研修や企業実務体験、多国籍な学生との異文化交流を体験することが中心となった。学生受け皿である海外提携校開拓も事業に先行して行い、平成28年度1月にオーストラリア・シドニー Whitehouse Institute of Design、5月にはオーストラリア・ブリスベンTAFE QUEENSLAND、6月に香港Hong Kong Design Instituteと締結し、平成29年10月Singapore Lasalle校そして平成30年にはオーストラリア・シドニー Raffles校と同意書を締結して研修候補地を充実させた。

国内学修プログラムは、日本の伝統文化工芸を学ぶ体験や日本が誇るファッションテキスタイルの産地研修、ファッションアパレル製品の縫製工場での研修、アパレル企業での企画・製品づくりなど、モノづくりの最前線で学修する内容、またファッション産業を構成する様々な業態の企業でのインターンシップ研修が事業内容である。

また、3年次の学修プログラムでは、ファッションマネジメント分野での長期間（8週間以上）の企業インターンシップ実習を実施した。海外での研修では海外提携校が現地でのインターンシップ受入企業の紹介・斡旋とインターンシップ生の相談窓口機能を果たしている。また、海外提携校の学生を本学で受け入れ、東京でのインターンシップを斡旋するなど、グローバルな交流をさらに進展させる動きも見えてきている。

国内企業インターンシップも受け入れ企業先に多少の濃淡はあるが同じく順調に推移している。

2.「梅春学期」年次別事業一覧

1・2年次対象の梅春学期の企画数と実施科目数の推移は次の通りである。

平成28年度	履修者数	平成29年度	履修者数	平成30年度	履修者数	令和元年度	履修者数
●国内梅春プログラム		●国内梅春プログラム		●国内梅春プログラム		●国内梅春プログラム	
和紙と漆でものづくり	4	〈梅春〉 和紙と漆でものづくり （飯山）	1	〈梅春〉 和紙と漆でものづくり （飯山）	4	＜梅春＞ 和紙と漆でものづくり2019 （飯山）	6
製造の現場で考える 日本の服づくり	3	〈梅春〉 素材からの商品企画 （東京新潟）	5	〈梅春〉 素材からの商品企画 （新潟・東京）	2	＜梅春＞ メンズファッション （岩手・東京）	2
		〈梅春〉 染めによる着物デザイン （新潟）	4	〈梅春〉 染めによる着物デザイン （新潟）	3	＜梅春＞ ファクトリーブランドの探求 （山梨・東京）	4
		〈梅春〉 オーダーファッション （東京岩手）	3	〈梅春〉 オーダーファッション （岩手・東京）	3	＜梅春＞ カットソーの製造現場 （山形・東京）	4
		〈梅春〉 カットソーの製造現場 （東京山形）	4	〈梅春〉 カットソーの製造現場 （山形・東京）	5	＜梅春＞ 染めによる着物デザイン （新潟）	5
		〈梅春〉 ハイブランドの製造現場 （千葉）	1	〈梅春〉 ハイブランドの製造現場 （千葉）	1	＜梅春＞ 素材からの商品企画 （新潟・東京）	3
		〈梅春〉 ファクトリーブランド （東京山梨）	5	〈梅春〉 ファクトリーブランド （山梨・東京）	6	＜梅春＞ ハイブランドの製造現場 （東京）	1
		〈梅春〉 ハイブランドの製造現場 （東京）	3	〈梅春〉 ハイブランドの製造現場 （東京）	3	＜梅春＞ ファッション企業研修 （東京）	11
		〈梅春〉 メイドイントウキョウの ものづくり	5	〈梅春〉 ファッション企業研修 （東京）	10	＜梅春＞ テキスタイルの製造体験 （東京）	4
		〈梅春〉 ファッション企業研修 （東京）	11				
●海外梅春プログラム		●海外梅春プログラム		●海外梅春プログラム		●海外梅春プログラム	
オーストラリア・ シドニー研修	5	〈梅春〉 ブリスベン研修	3	〈梅春〉 ブリスベン研修	2	＜梅春＞ ハワイ研修	8
		〈梅春〉 香港研修	2	〈梅春〉 シドニー・メルボルン研修	5	＜梅春＞ シドニー・メルボルン研修	12
		〈梅春〉 ニューヨーク研修	11	〈梅春〉 ニューヨーク研修	8	＜梅春＞ ブリスベン・ ゴールドコースト研修	5
		〈梅春〉 イタリアインターンシップ 実地研修	1			＜梅春＞ ニューヨーク研修	8
		〈梅春〉ハワイ研修	10			＜梅春＞ シンガポール・ インドネシア研修	1
●3年次プログラム		●3年次プログラム		●3年次プログラム		●3年次プログラム	
グローバルファッション マネジメント実習	13	ニューヨークパターン研修 （グローバルファッション 創造実習D）	2	グローバルファッション マネジメント実習	14	グローバルファッション マネジメント実習	3
		グローバルファッション マネジメント実習	12				
合計	25	合計	83	合計	66	合計	77

平成27年度は推進体制整備の年であり、平成28年度より科目を開講した。年度により参加学生数の増減がある。これは長期間企業等での実習のため、担当教員が事前に面接を行い、適性や意欲を確認の上で履修を認めたことや履修届後に天災等経済的理由で断念した学生も少なからず存在したためである。

第３章　本事業の評価と成果

1. 学内評価体制

本事業の評価体制については、学内で行う評価と学外の外部機関に対して報告を行い、評価を受けるやり方で実施してきた。

学内評価は、いくつかのステップを積み重ねて結果検証をして、次の企画に繋げるというPDCAサイクルを行っている。

第1ステップとして、プログラム担当教員と参加学生との間で事前教育の際に、ルーブリック評価を用いてプログラムの目的、成果目標や達成に向けたプロセスチェック等を相互に確認する。そして、プログラム終了後に、ルーブリックの結果を振り返り、評価する。さらに、学生一人ひとりが長期学外学修プログラムの振り返りと体験を生かして、これからの大学生活の目標設定やキャリアデザインの意欲等を報告書にまとめる。

尚、報告書は毎年発刊して、関係する教育機関、研修先企業や学内関係者へ配布して外部から評価を頂く手段としても活用している。

第2ステップは、USR推進室に設置されている『AP対応ワーキンググループ』での担当教員間の評価体制である。プログラム準備段階の前期から、後期の実施までに、グループ会議を数回開催し、プログラム内容報告、ルーブリックの効果的運用や学生対応、事前・事後教育の運営等について検討し、課題改善し、次のプログラムに反映させるという仕組みで行っている。ワーキンググループで討議された内容は、適宜開催される『USR委員会』で報告を行っており、委員会でも情報共有し評価が行われている。また、USR委員会では、人材育成に資する目的で学生の「社会人基礎力調査」を実施し定量的・定性的評価を行う。

第3ステップは、『AP担当者連絡会』における評価機能である。当連絡会は前述したように、担当教員と関係する大学事務職員から構成されており、本事業を遂行する上で、様々な局面に関連性が高い。特に、プログラム実施後に担当教員からの意見や提案を討議、評価して次年度のプログラム事業運用案を『AP推進協議会』に議案として諮ることは重要な評価機能である。

第4ステップは、『AP推進協議会』で上程されたプログラム事業運用案を審議、評価を行い、議決する流れである。

以上の4つのステップを経て、事業の結果検証、課題を抽出して次回のプログラム案に反映させていくというＰＤＣＡサイクルで評価体制を確立している。

さらに、大学全体での評価体制ということでは、『AP推進協議会』での議決されたプログラム事業案を各学部協議会で報告し、評価がなされる。

また、平成30年9月に全教職員を対象とする「全学FD・SD研修会分科会」において本事業をテーマに取り上げ、研修を実施した。これによって本事業に直接関わっていない教職員まで本事業の目的や意義が共有され、事業の量的拡大と質的向上に向けた基礎を築くことが出来た。

2. ルーブリック評価

学生の学修の成果をどのように見取り評価していくか、その方法の確立は重要な課題である。文化APにおいてはルーブリック評価の導入を試みた。

ルーブリック評価とは「評価指標（評価規準＝criteria＝学習活動に応じたより具体的な到達目標）と、評価指標に即した評価基準（standards＝scales＝description＝どの程度達成できればどの評点を与えるかの特徴の記述）のマトリクスで示される配点表を用いた成績評価方法のこと（沖裕貴：2014）」であり、学生の示したパフォーマンス（レポートや作品、プレゼンテーション等）を評価することに有効とされる。

文化APは、＜グローバル創造力＞の養成を目的としており、これは、コミュニケーション力（語学力＋デザイン表現力）、伝統・文化理解力、グローバルキャリアデザイン志向の3つの要素から構成されるものと位置づけた。したがって、ルーブリック評価の「評価指標」にこの3つ観点からなる到達目標をおいた。評価基準は、十分満足できる（A）／満足できる（B）／努力を要する（C）の3段階とし、さらに評価の対象とする素材（レポート、ワークシート、プレゼンテーション等）を明示したルーブリックを科目ごとに作成した（ルーブリックの一例は第3章資料集に示す）。履修学生には、ルーブリックの概要について事前に全体説明会を行ったうえで授業ごとのルーブリックは事前学習の中で担当教員がガイダンスを行ったうえで進めた。

平成29年度の文化AP終了後に、授業担当教員からルーブリック評価を試みての意見を求めた。「学生、企業の方にプログラムのねらいがうまく伝わったので良かった」「どのような評価方法で誰が評価するか学生が事前に確認することができたため、科目の狙い・目的を意識させる面で効果的であった」というように評価の透明性を肯定的に捉える意見が見られた。また「学生がプログラムが進むにつれて、ルーブリックで提示されていることがどのようなことかを考えながら、実現できるように努力する姿が見られた」というように学修の羅針盤として有効であるとの見解もあり、ルーブリックの有効性・有用性が確認できた。

一方で、「教員が引率しないため、研修現場での学生の学びについて直接的な評価を下すことができない。そこで、日報の提出を課し、研修の実施状況の把握を図った。日報は学生に学びの振り返りをさせるという役割を果たしたが、学生の主観的な記述であるため、本年度利用したルーブリックの素材には適していないように感じられた。来年度は、日報にルーブリックの評価項目を組み入れ、日報がルーブリック評価の適切な素材となるように工夫する必要がある」といった意見や、コミュニケーション力、伝統・文化理解力、グローバルキャリアデザイン志向の3つの指標だけでなく「研修内容の専門的知識の有用性・活用性に関する評価項目を設定していれば、より効果的だったのではないか」といった改善の必要性に関する意見も見られた。現在のルーブリックの枠組みは、グローバル創造力の育成という人材養成目標からのトップダウン型に構築しているが、研修科目固有の到達目標や経験価値がある。これをどうルーブリックに反映していくか、あるいは評価指標・評価基準・評価素材の適正化といった点に関して次年度に向けて改善が必要である。

ルーブリックの短所として「教育者にとっては、生徒のレベルにあったルーブリックを作成することが煩雑な作業となる」（薫陽子：2018）という見解やルーブリックの最適化には3年程度かかるという

指摘があるが、公平かつ客観的な評価をめざし改善に取り組んでいきたい。

・ルーブリック評価の事例：「和紙と漆でものづくり」

参考事例として「和紙と漆でものづくり」のルーブリックおよび、それを用いた評価を下に示しておく。

ルーブリック（評価指標及び評価基準）

グローバル創造力＝コミュニケーション力（語学力＋デザイン表現力）＋伝統・文化理解力＋グローバルキャリアデザイン志向

コミュニケーション力	努力を要する(C)	満足できる(B)	十分満足できる(A)	評価の素材
伝統工芸の技術を活用した地域PR商品を提案することができる。	地域PR商品は提案できたが、伝統工芸の技術が活用されないなど課題への理解が不十分である。	課題に則り、地域PR商品を提案できている。	課題に則り、実現可能性の高い、地域PR商品を提案できている。	最終作品(企画)
自分の企画についてプレゼンテーションすることができる。	企画の内容について、十分にプレゼンできなかった。	自分の企画を自分の言葉でプレゼンすることができた。	自分の企画を他者に適切にプレゼンし理解された。	プレゼンテーション(ワークシート／観察法)

伝統・文化理解	努力を要する(C)	満足できる(B)	十分満足できる(A)	評価の素材
飯山仏壇の特徴や伝統技法を理解できる。	体験活動への取り組みが消極的で飯山仏壇の特徴や技法を理解できなかった。	真摯に体験活動に取り組み飯山仏壇の特徴や技法を理解することができた。	積極的に体験活動に取り組み飯山仏壇の特徴や技法を理解することができた。	ワークシート(事前課題／活動記録)課題作品
内山紙の特徴や伝統技法を理解できる。	体験活動への取り組みが消極的で内山紙の特徴や技法を理解できなかった。	真摯に体験活動に取り組み飯山仏壇の特徴や技法を理解することができた。	積極的に体験活動に取り組み内山紙の特徴や技法を理解することができた。	ワークシート(事前課題／活動記録)課題作品

グローバルキャリアデザイン志向	努力を要する(C)	満足できる(B)	十分満足できる(A)	評価の素材
自分自身のキャリアデザインを考慮し目的意識をもって参加することができる。	目的意識が曖昧なままプログラムへ参加した。	目的意識をもって参加することができた。	十分に目的意識を明確に参加することができた。	ワークシート(事前課題)
APプログラムでの経験を通じて、今後の大学での学びへの応用や卒業後のキャリアについて考えることができる。	APプログラムでの経験を通じて、今後の大学での学びへの応用または卒業後のキャリアのいづれかについて考えることができなかった。	APプログラムでの経験を通じて、今後の大学での学びへの応用または卒業後のキャリアのいづれかについて考えることができた。	APプログラムでの経験を通じて、今後の大学での学びへの応用と卒業後のキャリアについてともに考えることができた。	ワークシート(ふりかえり)

ある参加学生に対する評価及びコメント

・コミュニケーション力

伝統工芸の技術を活用した地域PR商品を提案することができたか。

→A：内山紙を用いた紙製加湿器を考案し、デザイン試作や既存販売商品の調査も踏まえて提案することができた。

自分の企画についてプレゼンテーションすることができたか。

→A：現地での企画提案プレゼンテーションおよび、事後学習での学内プレゼンテーションにおいて自身の地域PR商品について堂々とプレゼンテーションをすることができた。

・伝統・文化理解

飯山仏壇の特徴や伝統技法を理解できる。

→B：仏壇に用いられる木彫、彫金、蒔絵などの技術を職人の指導のもと真摯に学び理解することができた。

内山紙の特徴や伝統技法を理解できる。

→A：内山紙の特徴や技法について、積極的に職人と関わり学ぶことができた。

・グローバルキャリアデザイン志向

自分自身のキャリアデザインを考慮し目的意識をもって参加することができる。

→A：ファッションに関する学科で学んでいる学生であるが、自身の視野を広げるという目的意識のもとファッションと直接かかわらない本授業を選択し参加した。

APプログラムでの経験を通じて、今後の大学での学びへの応用や卒業後のキャリアについて考えることができる。

→A：伝統工芸の職人たちとの交流を通して単に技術を学んだだけでなく、産業と生活環境との関わりにふれ、ものづくりのあり方として「自分がほしいもの」をつくっていくことの大切さに気づくことができた。

3. プログラムの成果

振り返りの効能――「気づき」を築き上げるための工夫

文化APの梅春科目において期待される効果は、学生が「グローバル化への気づき」を得ること、および、2（or1）年間の学びを振り返りその意義を自覚することで主体的な学びにつなげることの二つである。

梅春科目で目指される「グローバル化への気づき」をより簡潔に云い替えるならば、日本という地域のローカルな価値観やルールが相対的なものであるということを、実感をもって体験することである。「ニューヨーク研修」における学生の「気づき」は、「就活」を通して仕事につくという日本的なシステム以外の可能性への実感であった。

2（or1）年間の学びを振り返りその意義を自覚することで主体的な学びにつなげることは、ものづくりの「技術」やデザインを教える大学であることに由来する成果だと考えられる。実践的な技術教授において、その「実践性」を学生に伝えることはできても、体感させることは難しい。学外学修プログラムが学生に与えるのはこの「実践性」である。

それぞれの科目設計上の工夫の効果があることは間違いないが、「実践性」を伝えるために「梅春科目」の全科目で実施した学修の「振り返り」が効果的だったことも強調すべきである。より具体的には、事後研修として実施した報告会がそれにあたる。

企業などでの経験が重要であることは云うまでもないが、体験を一度客観的に見直して、自分は何を経験して、どのように感じたかを他者に向けて言語化することは、経験それ自体と同じく重要である。

例えば、ある科目に参加した学生が報告会において「大学で学んだことが役に立たなかった」という感想を述べたことがあった。このような感想に対して、報告会に参加した研修先企業の方からは、「大学で学んできたからこそ足りないものを感じられたのだ」という趣旨のコメントが出された。

服づくりを学ぶ際に、特に1・2年次学生に求められるのは、基礎的な技術の習得である。基礎的な技術とは、文字通り、服づくりの土台をなすものであるが、基礎のみで十分でないことは云うまでもない。学生は基礎的な技術を習得したのちに、より専門的な技術の習得に進むことになる。

しかし、大学内での指導のみで、学修段階を学生自身に自覚させることは容易ではない。技術の習得が重視されるため、その技術が実際にどのように使われるのか、という視点を学生に持たせにくいからである。何のためにある技術を習得しているかを意識させづらい。

まだ基礎的な技術しか学んでいないという点において、「大学で学んだことが役に立たなかった」という学生の意見は、半分正しい。しかしながら、このような意見が出されたことは、学生たちがこれまではどのように役立つのかを考えながら技術の習得にのぞんでいなかったことをあらわすものでもある。

しかしながら、梅春科目の研修を通して、漫然と学ぶのではなく「何のために」や「なぜ」という問いを携えながら自主的・自律的に学ぶ必要性に学生たちが気づいたことを示すものでもある。

このように、否定的にも感じられる「大学で学んだことが役に立たなかった」という感想であるが、この感想が2年間の大学での学び（技術の習得）を振り返るきっかけとなっていたと考えることできる。

「大学での学んだことが役に立たなかった」と述べた学生に対する、受入先企業の担当者からの「大学で学んできたからこそ足りないものを感じられたのだ」という指摘は、学生に自分たちが何を学んで

きたのかを考え直すきっかけとして機能していた。研修という経験が、2年間の学びという経験に結び付けながら振り返る契機となっていたのである。

「気づき」のきっかけを与えるのは、企業担当者や教員等の「教育的立場」にある存在だけではない。他の学生の発表を聞いたことにより、まったく別の地域で研修を受けていた学生が「そういえば…」と自分の経験を捉えなおす場面も多々見られた。

このように、経験を言語化するだけではなく、それを教員や他の学生達と共有し意見や指摘をもらうことにより、一度言語化した自らの経験を客観的に見直すことができ、自らの経験を捉えなおすことができるのである。「気づき」が生みだされるのは、このような瞬間であり、報告会は「気づき」をつくりだす機会となっていた。

大学4年間の学生の学びは、大学内に限定されるものではない。重要なのは主体的に学ぶ姿勢を身につけているかどうかであり、学ぶ目的を自覚しながら、学内での学修と学外での学修の往還関係を築いていくことである。この点において、報告書の作成や報告会の実施は、学修目的の明確化という点で非常に有効であると考えられる。

4. 教育効果の検証

（1）教育効果の検証――梅春科目の履修が3・4年次の成績に及ぼす効果

梅春科目履修が3・4年次の成績に影響を与えているかを検証するため、履修者と非履修者によるGPA平均値に差がみられるかをt検定を用いて分析した。これは、1・2年次に梅春科目を履修した学生の3・4年次の平均成績が梅春科目を履修しなかった学生の平均成績よりも高いかどうかをt検定という統計手法を用いて明らかにするものであり、高いという結果がでた場合には、梅春科目の履修が3・4年次の成績に影響を与えている可能性が高いと考えられる。

表1．平成28年度入学学生の梅春科目履修の有無によるGPA平均の差

	履修の有無	平均値	標準偏差	*N*	t値	
1･2年次累積GPA	履 修 者	3.357	.673	29	1.809	p<.10
	非履修者	3.122	.743	488		
3･4年次累積GPA	履 修 者	3.125	.868	29		
	非履修者	3.006	.869	488		
3･4年次累積GPA ー1･2年次累積GPA	履 修 者	-.230	.540	29		
	非履修者	-.115	.599	488		
1年次前期GPA	履 修 者	3.655	.342	29	3.652	p<.001
	非履修者	3.399	.632	488		
1年次後期GPA	履 修 者	3.296	.859	29		
	非履修者	3.083	.869	488		
2年次前期GPA	履 修 者	3.339	.804	29	1.743	p<.10
	非履修者	3.069	.867	488		
2年次後期GPA	履 修 者	3.131	.892	29		
	非履修者	2.932	.987	488		
3年次前期GPA	履 修 者	3.066	1.130	29		
	非履修者	3.116	.997	488		
3年次後期GPA	履 修 者	3.175	1.006	29		
	非履修者	3.139	1.003	488		
4年次前期GPA	履修者	3.136	1.179	29		
	非履修者			488		

表2．平成29年度入学学生の梅春科目履修の有無によるGPA平均の差

	履修の有無	平均値	標準偏差	*N*	t値	
1･2年次累積	履修者	3.345	.733	48	1.811	p<.10
	非履修者	3.147	.731	650		
3年次前期― 1･2年次累積	履修者	.054	.716	48		
	非履修者	-.086	.773	650		
1年次前期GPA	履修者	3.598	.596	48	2.259	p<.05
	非履修者	3.395	.669	650		
1年次後期GPA	履修者	3.436	.666	48	2.336	p<.05
	非履修者	3.156	.812	650		
2年次前期GPA	履修者	3.296	.908	48	1.857	p<.10
	非履修者	3.043	.906	650		
2年次後期GPA	履修者	3.045	1.151	48		
	非履修者	2.987	.949	650		
3年次前期GPA	履修者	3.398	.793	48	2.163	p<.05
	非履修者	3.059	1.062	650		

分析の結果は表1・2の通りであり、1・2年次の成績が良い学生が梅春科目を履修する傾向がみられたが、梅春科目の履修が3年次以降の成績に効果を与えるという結果は見られなかった。現時点で梅春科目は、成績が良く意欲の高い学生に対して、通常の科目とは異なる学修の機会提供するものとなっていると考えられる。

（2）教育効果の検証――履修学生へのインタビュー

GPAなど数量的なデータとしては表れない質的な効果を明らかにするために、履修学生のうち3年次前期における成績が1・2年次と比較して大幅に増減した学生を対象に、梅春科目履修中の状況および履修後の意識等の変化について、下記の5項目からなる半構造化インタビューを実施した。

1.「梅春科目で最も印象に残っている経験・エピソードは何か。」
2.「梅春科目参加中の自分の参加態度に関する振り返り（積極的に取り組めたか否か）」
3.「梅春科目に参加して能力が向上または意識が変容したと思うか」
4.「「能力向上」に関してどのような能力が向上したと思うか」
5.「「意識」に関してどのような変容があったと思うか」

具体的な回答内容は科目によって異なっていたが、大きな傾向は次のようにまとめることができる。

まず、国内梅春科目の参加学生が挙げていたのは、大学では学べないこと（オリジナルの布地の作成や工場における専門的な縫製工程）を経験できたということであった。この経験をもとに、大学の講義に限定せずに「自身のスキルを上げるための講習会などに積極的に参加している」という学生もいた。

製造と接客を共に経験した学生からは「縫製よりは接客が向いていると感じた」と答えが、実習内容が期待と違っていたという感想を述べた学生からは「自分に向いている仕事について真剣に考えることになった」という答えが出ており、自分自身の適性をはかる機会として活かされていることも確認できた。

また、海外梅春科目の参加学生に共通してみられる答えは、自分の英語でのコミュニケーションのレベルがわかったということ、様々な国籍の人たちと接することができたということ、この二点である。学生に自身の状況を再確認する機会として機能していたことがうかがえる。

このように、梅春科目を履修した結果、その経験を大学での学びに活かしている傾向があること、また、履修を通して、新たな目標を発見するだけではなく、それまでもっていた目標が梅春科目の履修によって明確となり目標達成にむけた具体的課題に気づく傾向があることが明らかとなった。

5. 学外評価体制

学外から評価をいただくことを目的に、外部機関での報告やシンポジウムやパネルディスカッションの開催を毎年おこなってきた。以下はその一覧である。

（1）「ファッションビジネス学会報告事例」

本事業は、ファッション分野における特徴的な長期学外学修プログラムである。その意味で、学外から評価をいただく場として、全国のファッション系教育機関が一堂に会するファッションビジネス学会で報告の機会を得ることに傾注してきた。

平成29年度11月のファッションビジネス学会では、平成28年度の試験的実施をもとにした成果報告を行い、評価をいただくと同時に、本事業のファッション教育関係者への周知を図った。

平成30年11月のファッションビジネス学会では、平成29年度本事業の本格的展開をおえて、ファッション教育分野における先駆的なモデルとしての外部評価を受けた。参加者の関心も高く、活発な質疑応答が交わされた。

（2）「APプログラム成果報告会」の開催

令和元年5月には、「APプログラムの成果報告会」を一般公開して、取り組みの内容と教育成果の評価をいただく機会を設定した。この報告会は学生主体で行われ、海外2プログラム、国内7プログラムに参加した学生が発表した。自らの体験や得られた成果を自身で発表することで、実りのある成果発表会となった。この成果報告会には文部学省にご参加いただき、好評を博した。

（3）「APプログラムテーマⅣ　合同総括シンポジウム」

令和元年12月に外部評価を受けるために新潟大学で開催されたテーマⅣ合同総括シンポジウムにおいて、梅春科目の取り組みに関する報告を行った。モノづくりを教えているという本学の特性にあわせた授業設計、研修後の報告会や報告書執筆によって学生に「振り返り」の機会を与えていることなど運営上の工夫を紹介した。

（4）「報告書配布による学内外からの評価」

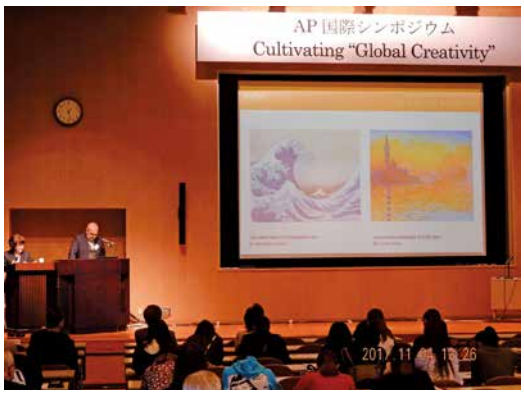
平成27年度より継続的に本プログラムの参加学生による報告書を発行している。報告書は、ファッション関連の教育機関、関係する機関、学生受け入れ企業はじめ学内関係者、学内研究室に配布し評価をいただいている。本報告書もこれにあたるものである。

また、澤邉潤・木村裕斗・松井克浩編『長期学外学修のデザインと実践』（東信堂）に「グローバル創造力の養成を目指して＜梅春学期＞の新設とその展開―文化学園大学」を寄稿し、ファッション分野における長期学外学修の成果を広く社会に周知させることが可能となった。 なお、その一部は3章3節において紹介している。

（5）「国際シンポジウム」開催

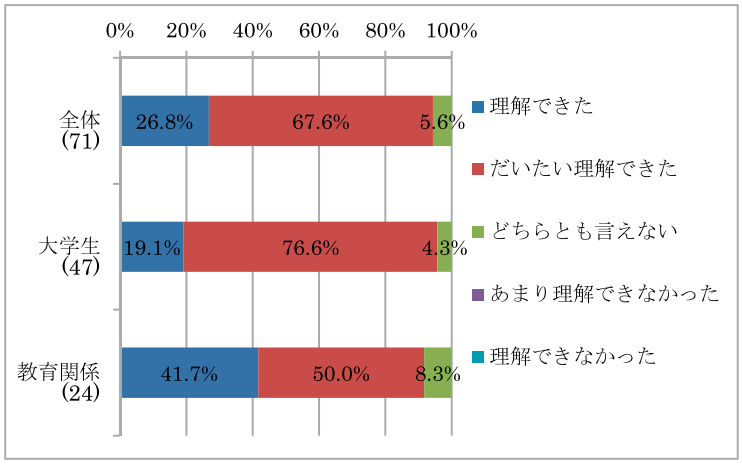
平成28年度の試験的実施を踏まえ、本プログラムの周知と報告、課題の共有と外部評価を目的とする国際シンポジウムを平成29年11月4日文化祭期間中に開催した。

オーストラリア・シドニーでの受け入れ校であるRaffles College of Design and Commerceの担当教員2名、長野県飯山市観光局の担当者、梅春科目の参加学生、3年次のインターンシッププログラムの参加学生が登壇し、本学の長期学外学修プログラムの紹介とパネルディスカッションを実施した。文化祭期間中に開催することで、高校教員やファッションに関心を持つ多くの人たちが参加いただき本プログラムの取組内容を周知することができた。



国際シンポジウムに関するアンケート調査結果報告書（抜粋）
（設問項目）本学の AP プログラム全体の取組概要について

図 1



全体的に見ると、「理解できた」が 26.8%「だいたい理解できた」が 67.6% であり、参加者のうち 94.4% が大凡理解できたと回答している。

（６）「ファッション系教育におけるグローバル人材育成――プログラム報告とパネルディスカッション」

令和元年11月にはファッションビジネス学会での併催イベント「ファッション系教育におけるグローバル人材育成」をテーマに、APプログラムの報告とパネルディスカッションを実施した。このパネルディスカッションは申請時にInternational Foundation of Fashion Technology Institute（国際ファッション工科連盟大学）で行う報告に代わるものとして企画したものである。

6. 本事業の成果と波及効果

本学の事業は、ファッション教育領域における長期学外学修という特徴的な内容のプログラムである。

波及効果についてもある程度はファッション領域に限定されるという認識はある。申請調書の時点から波及効果については、全国のファッション関係教育機関の担当者が一堂に会するファッションビジネス学会は念頭にあった。その他、広く内外に発信できるパネルディスカッションやシンポジウム企画をはじめ、事業報告書を発刊し関係教育機関に配布やWebなど事業モデルを波及させる手法で下記の通り取り組んできた。

平成29年11月4日には平成28年度の試験的実施を踏まえ、文化祭期間中に国際シンポジウムを開催した。オーストラリア・シドニーでの受け入れ校であるRaffles College of Design and Commerceの担当教員、長野県飯山市観光局の担当者、梅春科目の参加学生、3年次のインターンシッププログラムの参加学生が登壇し、本学の長期学外学修プログラムの紹介とパネルディスカッションを実施した。文化祭期間中に開催することで、高校教員やファッションに関心を持つ多くの人たちに本プログラムの取組内容を周知し、波及のきっかけとなった。

平成29年11月25日にはファッションビジネス学会において試験的実施をもとにした成果発表を行い、ファッション教育の関係者への周知を図ると同時に、外部評価を受けた。

さらに、本事業に対する外部評価を得るとともに、ファッション教育分野における先駆的なモデルとして本プログラムの成果を普及させることを目的として、実地研修後の報告会の実施や報告書の執筆などの「ふりかえり」の効果に関する発表を平成30年11月24日にファッションビジネス学会において行った。

令和元年11月10日に外部評価を受けるために新潟大学で開催されたテーマⅣ合同総括シンポジウムで、報告した。

令和元年11月16日に全国のファッション関係教育機関が集うファッションビジネス学会全国大会が本学で開催され、本事業内容の外部への告知、情報発信、および外部評価を受けることを目的として、ファッションビジネス学会全国大会併催イベントとしてAPパネルディスカッションを企画・開催し、報告した。当日は多数の教育担当者も参加いただき活発な意見交換ができた。

これらにより効果的な学修機会を提供し、事業を推進させるための取組改善につながる意見を得ることができた。

媒体物の波及効果取り組みについては、平成27年度より継続的に本プログラムの参加学生による報告書を発行している。また、本プログラムのうち3年次に実施している8週間の「グローバルファッションマネジメント実習」や1・2年次を対象とする4週間の「梅春科目」の成果報告会では、受入企業等の外部の方々の参加を募り、プログラムの成果を外部に発信することにつとめている。これらの報告書は関係する教育機関や関連企業、学内関係部署へ配布している。

また、澤邉潤・木村裕斗・松井克浩編『長期学外学修のデザインと実践』（東信堂）に「グローバル創造力の養成を目指して＜梅春学期＞の新設とその展開―文化学園大学」を寄稿したことで、ファッション分野における長期学外学修の成果を広く社会に周知させることが可能となった。なお、その一部は第3章3節で紹介している。

7. 本事業の総括―今後の展望と課題

本事業は、平成27年度から5年間のプログラムである。初年度は海外提携校との折衝、受け入れ企業の開拓を行い、平成28年度に試験的期間として海外1か所、国内2か所で実施した。平成29年度からを本格的実施年と位置づけ、海外5科目、国内10科目で開催し、以降最終年度の令和元年度まで国内126名、海外81名、3年次科目44名、合計251名の学生が参加した。参加学生数は、目標数値には残念ながら未達であった。ひとつの要因は第1章で既述の通り担当教員が面接を行い、適性や意欲を確認して絞り込んだことである。また、海外・国内ともに、受け入れ企業からの要望や学習効果を高めるため、各プログラム参加学生も5名程度の少人数に絞り込まざるを得なかったことも要因である。

一方、参加した学生の報告書に記載されているように、この「長期学外学修プログラム」における体験を通して、多くのことを学び、気づきが得られ、将来の目標設定を考えられる力がついたことなど、教育効果は得られたと判断できる。

本事業の目的である、学外学修プログラムを通じて、学生が主体性や行動力を身につけ、グローバルコミュニケーション力、異文化交流や伝統・文化理解力、グローバルキャリア志向力を高めて、「グローバル創造力」を養成する目標は、ほぼ達成できたといえる。

学生たちが、企業や製造現場に長期間滞在し、仕事をすることの理解や人とのコミュニケーションの大切さなど、社会との様々な局面での接点を持てたことにより社会人としての自覚を認識できたこと。また、伝統工芸、テキスタイルや縫製工場といった“モノづくり”の現場に長期滞在して、プロの職人の方から“モノづくり”に対する思いを直に聞くことができたこと等、培われた技術や伝統を身近に感じ、吸収できたことは大変意義深いことであった。

海外プログラムでは、語学研修や現地学生との交流、企業体験、ファッションイベント参加など、英語での国籍・人種の違う人々と触れ合う交流事業を実施した。学生たちは、改めて日本と海外の違い、異文化交流を体験してグローバルな視野を持つことの重要性を認識することができた。

これらの体験を終えて、多くの学生たちが、自身の知識やスキルの足りなさ、求められる能力に気づいたことで、これからの大学生活で学ぶべきこと、将来のキャリアデザインの目標設定が明確になった等、主体性をもって考える力をつけてきていることは心強い。

本格的実施の平成29年度以降の3年間で、地道ながらもプログラムの目標成果が着実に上がり、「全学FD・SD研修会」などを通じて学内での認識度が高まってきていることも喜ばしいことである。

今後の課題としては、より幅広く学生が参加できるようにプログラムの見直しや分野の拡大も必要である。そのためには、より多くの教員が参加しやすい体制づくりをすることが重要であると考える。また、今後のプログラム充実を見据えて、教員と受け入れ先企業や関係機関との情報交換、信頼関係醸成も重要なポイントある。

もう一点は、プログラム研修を終え意欲やモチベーションが高まった学生たちを、どのような方法でフォローアップしていくかということも対応が必要な課題ととらえている。

定期的な情報交換会、学生グループによるフォローアップ発表会開催等、今後の検討が必要である。

本事業は、学生の成長に資するプログラムであるが、同時に、学生を指導し成長を見守りつつ、教員も併せて成長することができるプログラムである。今後は、さらに多くの若手教員の参加を促し、本事

業が産学連携プロジェクトとしてより充実するよう努めたい。

しかしながら、これらの本事業の実施に当たっては、担当する教職員の負担、労力が大きいことも事実である。文部科学省の「長期学外学修プログラム」は令和元年度で終了したが、それ以降も事業継続をするために、学内における推進組織は維持継続することを決定した。教職員の負担軽減に向けた取り組みは今後の課題である。

また、海外におけるリスクマネジメント対応も欠かせない大事な取り組み課題である。全学的なリスクマネジメント体制は確立されているが、教員の手の届かない現場の実務面でのフォローアップ体制の検討は必須である。

最後に、本事業は令和元年度で終了したが、「梅春学期（2月～3月）」に加えて、本学では令和2年度より1コマの授業時間を90分から100分に変更したことに伴い、半期の授業を15週から14週にしたことで「夏学期（8月～9月）」開催も可能となり、今までの実績を踏まえたプログラムの充実を計画している。より多くの学生の参加を促し、学修意欲の向上、教育機会の拡大を目指したい。また、学会などでの成果発表を行い、ファッション教育分野での人材育成に貢献していきたいと考えている。

以上

第４章　令和元年度報告書

〈梅春〉和紙と漆でものづくり2019　飯山

授業概要

長野県飯山市は日本のふるさとの原風景が色濃く残る地域であり、飯山市には「内山紙」と「飯山仏壇」の二つの伝統工芸品がある。

この授業では、紙漉きや仏壇づくりに用いられる漆芸、蒔絵、彫金といった伝統工芸の技法を職人に直接指導してもらうとともに、これらの技法を用いた商品等のデザインにチャレンジする。

伝統の技や職人のものづくりに対する考えに触れ、グローバル化が進む中で「COOL JAPAN」を世界にむけて発信できる力を身につけたい。

到達目標

(1)「内山紙」の紙漉き体験を通して、和紙がどのようにできるのかを理解するとともに、和紙職人のものづくりに対する思いを感じることができる。
(2)「飯山仏壇」の彫金、蒔絵、漆芸、木彫などの体験を通して仏壇がどのようにできるのかを理解するとともに、和紙職人のものづくりに対する思いを感じることができる。
(3) 伝統の技や職人のものづくりに対する考えに触れた上で、「COOL JAPAN」を世界にむけて発信できるデザイン企画をすることができる。
(4) 自分の企画についてプレゼンテーションすることができる。
(5) 自分自身のキャリアデザインを考慮し目的意識をもって参加することができる。
(6) ＡＰプログラムでの経験を通じて今後の大学生活での学びへの応用や卒業後のキャリアについて考えることができる。

期間／スケジュール

第1回 事前学習（都内研修）	2月12日（水）～15日（金）	・オリエンテーション ・都内フィールドワーク（銀座長野／紙の博物館／浅草仏壇通りなど） ・事前課題のリサーチおよび提出
第2回 現地学習１日目	2月17日（月）	・飯山市到着、各所へのご挨拶　市内視察
第3回 現地学習２日目	2月18日（火）	・飯山仏壇に関わる技術を学ぶ（1）漆／蒔絵／彫金／木彫　などの見学と体験
第4回 現地学習３日目	2月19日（水）	・飯山仏壇に関わる技術を学ぶ（2）漆／蒔絵／彫金／木彫　などの見学と体験
第5回 現地学習４日目	2月20日（木）	・飯山仏壇に関わる技術を学ぶ（3）漆／蒔絵／彫金／木彫　などの見学と体験
第6回 現地学習５日目	2月21日（金）	・飯山仏壇に関わる技術を学ぶ（4）漆／蒔絵／彫金／木彫　などの見学と体験
第7回 現地学習６日目	2月22日（土）	・自由行動 ※オプションで、スキー、スノーシューなどのスノーアクティビティに参加可
第8回 現地学習７日目	2月23日（日）	・自由行動 ※オプションで、スキー、スノーシューなどのスノーアクティビティに参加可
第9回 現地学習８日目	2月24日（月）	・内山紙に関わる技術を学ぶ（1）紙漉きの見学と体験
第10回 現地学習９日目	2月25日（火）	・内山紙に関わる技術を学ぶ（2）紙漉きの見学と体験

成果と課題

教育の成果：「内山紙」「飯山仏壇」は地域の自然環境に根差した工芸であり、冬場の雪や盆地という地形が品質の維持のために不可欠である。現地に滞在しながら研修を受講できたことで、こうした産業を支える「地域性」にまで触れることができた。工芸士の「技術」や「思い」への理解（到達目標（1）（2））に加え、こうした短期研修や座学では伝えられない事柄を体験的に学べたことは、教育の成果であるといえる。

課題と改善点：授業実施後に過去の履修学生から、卒業研究として同プログラムで得た経験を元に作成した作品を提出したとの報せを受けた。続く大学院入試でもこれを核としたポートフォリオを使用したとのことであった。履修以降の大学生活や卒業後のキャリアへの結び付け（到達目標（5）（6））について、授業内で効果的な意識付けを行うのは難しいが、こうした経験を紹介することも、ひとつの手段であると感じた。今後の課題と改善点である。

総括と今後の展望

長期研修の持つ最大のメリットは、月並みではあるが、プログラムの講師と多くの時間を共有することによって、見聞きした事柄に対する理解が深まることであろう。本プログラムは、「技術」を経験的に学ぶことを目的としたものであるため、一日単位での研修内容については事前に計画を立て講師となる伝統工芸士と共有したが、日々の詳細なスケジュールについて教員側からはあえて口を出さず、担当頂く工芸士に一任した。終了後に聞いた履修学生の感想には、技術指導についてのそれが最も多かったことは当然であるが、その一方で、休憩時間に聞いた話が大変印象深かったとの声が数多く聞かれた。

そこで聞いた話というのは、技術指導の内容を間接的に補うものが殆どであり、「ものづくりに対する思い」の多くは、この休憩時間の会話の中で伝えられていたことが分かった。到達目標の（1）（2）に掲げたように、本プログラムでは「技術」を学ぶことで、工芸士の「ものづくりに対する思い」を理解することを重視している。これが工芸士と長い時間を共有することで可能となった事実を改めて確認し、長期学外学修プログラムの持つ大きな教育効果として、ここに指摘するものである。

伝統工芸士の中には、自身の技術や作品、またものづくりと向き合う姿勢について、言葉として語ることに慣れていない方もいる。大学において、口頭やメールによる「概要の伝達」を常におこなう我々は、短時間でなされる説明に多くの期待を寄せてしまうが、この方法で「技術の背景にある思い」を適切に伝えるのは簡単なことではない。これは長期学外学修プログラムであればこそ伝えられる内容であったと、振り返って考えてみて改めて感じている。今後のプログラムにおいても、このことを強く意識して構成を考えてゆきたい。

所属学部学科 | 造形学部　デザイン・造形学科

▶履修の目的･目標

目的は、活動の中で自分がこれまで知らなかった和紙や飯山仏壇に使われる伝統工芸の技を直接見て、実際に体験することで、伝統工芸品の特徴や性質を学び、自分の創作の幅を広げること。目標は、伝統工芸の技や伝統工芸品の特性を生かし、飯山の魅力を伝えられる新しい地域PRを企画・提案すること。また、今回の活動の中で、今後の創作活動をする上で役に立つ技術や知識を得ること。

▶研修で最も印象にのこったことについて

これまで私は、和紙は、折り紙と同様に折ったり、切ったりして飾りに使うものだと思っていた。だが、今回の活動で内山紙がアクセサリーの一部として使われていたのはもちろんのこと、内山紙で作られたバックや財布に衣類・クッションに衝撃を受けた。そして、内山紙は、耐久性に優れているにも関わらず薄く柔らかい。それは、原料となる楮の繊維が長いことにある。こんにゃくのりや柿渋で防水性を出したら、縫う、金具を取り付けるなどの布でできることを内山紙でも再現できる。それを利用して様々なものを職人が内山紙で積極的に制作している。このような内山紙の特徴やそれを利用したアイデアなどを作り方も交えて和紙職人に体験の中で教えられたことが大きな刺激になった。

▶研修を通して気づいた事・学んだこと

なぜ、和紙を衣類やバックなどの耐久性が必要なものの素材として使うというアイデアが思いつくのか私は最初、疑問に思った。だがそれは、内山紙に長年向き合った職人だからこそ考え付いたのだと研修の中で気づいた。これまで私は、和紙が出来上がった状態しか見たことがなく、装飾としてしか考えなかったのでその特性や機能性を考えていなかった。だが、実際に作り手の目線で見ると「内山紙」としての強度や柔らかさなどの特徴が布との共通点に見えてきた。布に似ていると気づいたらその違いとして水がかかると和紙は溶けることだと気づき、それを克服するためにはこんにゃくのりや柿渋を塗ることだと分かるのだろう。

このように、作り手の目線になることで、これまで気づかなかった性質や特徴が見えてくるということが分かったことは、企画を考えるうえで大きなヒントになった。

▶今後の学生生活に生かしたいこと

私はこれまで、自分は、柔軟な考え方ができてクリエイティブな人間だと思っていた。だが、飯山で伝統工芸の研修をするまで和紙を装飾の素材として使うという考えから抜け出せず、内山紙の機能性や自由度の高さに気づけなかった点で、自分の視野は狭く、様々な方向から物事を見る力があまりないことに気づいた。これからは、将来私が何かを作る人間になったときのために、素材のあらゆる可能性について、扱う立場としてだけでなく作り手の目線をはじめとしたさまざまな位置から見て考えられるようになろうと目標を立てた。また、今回身に着けた技術や知識をこれまでの授業などで習ったこと、これから習う内容と切り離さずにつながる部分や応用できる部分などを考えて残りの学校生活を送っていこうと思った。

〈梅春〉メンズファッション

東京
岩手

～工場からの服づくり～

授業概要

メンズファッションを製造する工場で研修することにより、一連の生産工程、服づくりの背景を理解する。研修先は、日本ソーイング株式会社（岩手工場)、株式会社二戸サントップの２社を予定している。

到達目標

(1) 縫製工場での生産過程を理解することができる。
(2) 日本の服づくりの技術力を認識することができる。
(3) 自分自身のキャリアデザインを考慮し目的意識をもって参加することができる。
(4) ＡＰプログラムでの経験を通じて、今後の大学での学びへの応用や卒業後のキャリアについて考えることができる。

期間／スケジュール

令和2年2月13日（木）～3月5日（木）　17日間

2/13（木） 事前説明会	
2/17（月）～2/21（金） 研修(岩手)：日本ソーイング株式会社岩手工場、最終日／近隣工場見学	2/22（木）～2/23（日） 北いわて学生デザインファッションショー
2/25（火）～2/29（土） 研修(岩手)：株式会社二戸サントップ	
3/3（火）～3/4（水） 事後教育：研修報告書作成、発表準備	3/5（木） 研修内容発表、報告書提出

成果と課題

1人1着ジャケット・パンツ・コートを縫製するという研修を通して、メンズファッションの生産工程、服づくりの背景を実体験しながら学ぶことができた。日本ソーイング株式会社では、オーダースーツの一連の製造ラインを生地の在庫管理、着分カット、CAMによる一枚裁断について機器の機能などと共に理解することができた。また、株式会社二戸サントップでは、国内外の有名ブランドを手掛る量産工場としての製造ラインの仕組みを学び、そして、紳士服と婦人服の違いや、高級ウール素材の毛芯ジャケットの特徴について理解することができた。

加えて、日本ソーイング株式会社および株式会社二戸サントップの2か所での研修、岩手県二戸地域縫製工場の見学を通して、日本の工場が持つ縫製技術の高さを認識し、それぞれの工場の特色を比較しながら学ぶことができた。今後は、研修先とのより細かな連携強化を進めるとともに、教育内容のさらなる充実を図りたいと考える。

総括と今後の展望

プログラムのデザインでおこなった工夫は、シラバスでの到達目標、そして研修内容と週ごとのステップアップをシンプルかつ明確にしておくことである。そうすることで、受け入れ企業・学生にも一貫したプログラムのメッセージを伝えることができる。また、学生の集中力を4週間維持させるために、事前学習・現地研修・事後学修の日数と時間数のバランスを取ることも重要である。

プログラムの運営においておこなった工夫は、現地出張などを通して受け入れ企業や地元自治体関係者の方々との綿密な打ち合わせを行うことである。また、受け入れ企業と学生の橋渡し役としてお互いの情報を細かに伝達しておくことも重要である。

長期学外学修プログラムを行う上での課題は、研修日数である。プログラム内容の充実のため、研修日数を多く確保することも考えられるが、日数が多くなればなるほど、受け入れ企業への負担が増え、そして学生の集中力も下がるので、縫製工場の場合フル勤務日数は4日程度が理想的であると感じた。些細なことでは、宿泊先において個人部屋を確保することである。研修学生達は、朝から晩まで一緒にいるので、個人部屋を用意しておくことが学生の心身休養のために有効であると感じた。基本的なことでは、学生の研修参加態度である。研修への意欲に対して態度が伴っていないと相手に誤解を与えてしまう場合もあるので、学生にはどんな時でも挨拶をきちんとするということを徹底させた。

長期学外学修プログラムの教育効果は、やはり学校で学べなかったことが学べるということである。研修日誌などを見ると、学生が毎日本当に多くの事を吸収していたと読み取ることができた。

長期学外学修プログラムの今後としては、学生への研修資金のサポートとして、なんらかの資金援助があることが望まれる。また、吸収した成果をその一時の満足感としてだけでなく、大学に戻ってからの学校生活、そして自分の将来へと生かせるように、事後報告会・研修会・懇親会などを通して一定のつながりを保つ取り組みがあるとさらに良いと感じた。

所属学部学科 | 服装学部　ファッションクリエイション学科

▶履修の目的･目標

今回私がこのプログラムを履修した理由は学校で作品として作る服作りと工場で商品として作る服作りはどのように違うのか、またオーダーメイドの服作りと既製服の服作りではどのように違うのか知りたかったからです。今回のインターンシップを通して縫製工場の現状や雰囲気、どのように服が作られていくのか実際に目で見て体験し自分のファッション業界の知識を広げていきたいと思います。

▶研修で最も印象にのこったことについて

今回の研修で最も印象の残ったことは縫製工場で働く人の技術力、応用力です。縫製工場は1日の生産数が決まっておりその生産数にならない限り仕事は終わりません。その限られた時間の中でスピード、縫製の綺麗さ、素材によっての糸調子替え、その服がどのようなデザインでどのような縫製をするのか縫製仕様書を見て瞬時に判断しなければいけません。一つ一つの作業に一切の無駄がない作業で、これを簡単に当たり前のようにこなしている姿を見て私は感銘を受けました。

縫製工場の方達が一丸となり一つの服をそれぞれが決められた役割でミスなく当たり前のようにこなす。これは何年も働いているからこそできる技術、能力であり、縫製工場全体が良い服を作り上げるという意思がないとできないことだと感じました。

▶研修を通して気づいた事・学んだこと

今回は日本ソーイングさんと二戸サントップさん三和ドレスさんの縫製工場を見学し、日本ソーイングさんではスピードを優先し二戸サントップさん三和ドレスさんではスピードよりは技術力を重視しているように感じました。日本ソーイングさんは完全オーダーメイド紳士服の縫製工場であり、二戸サントップさんと三和ドレスさんは高級既製服を手がけているため、それぞれオーダーメイドと高級既製服の違い、何に重点を置いているのかの違いを知る事ができました。また工場によって生産数が大きく異なり日本ソーイングさんは比較的生産数が多いため作業効率を重視しており、二戸サントップさん三和ドレスさんは生産数が少ないため一つ一つの工程作業のスピードがゆっくりでそれぞれを比較する事ができました。

▶今後の学生生活に生かしたいこと

今回の研修を通して自分の縫製技術の低さを再確認する事ができました。自分の中では縫製は得意な方だとは感じてはいたものの、自分の縫製と縫製工場の方の縫製を比較した時に正確さや糸調子、スピード、仕上がりに大きな差がありました。縫製のプロの方々と自分の縫製を比較する事ができ、とても貴重な経験をする事が出来ました。今後は今以上に縫製技術を高め作品としての服、つまり自己満足で終わる服だけ作るのではなく商品として販売できる程の完成度の高い服作り、相手に満足して貰えるような服作りにも挑戦して行きたいと思います。今回得た知識、技術は今後の作品制作やファッションショーさらに自分が実際にアパレル業界に就職した際に生かして行きたいと思います。

〈梅春〉ファクトリーブランド

東京
山梨

授業概要

日本のアパレル流通は企画・製造・販売の流れの中に商社や卸といった中間業者間に多く入る多段階構造となっている。この構造は、リスク回避、生産・販売数量の調整機能、小売店頭の品揃強化等の点において、利点があったが、中間マージンによるコスト高に繋がるというデメリットもある。本科目はファクトリーブランド「evam eva」を展開する近藤ニット株式会社での学外研修である。企画立案からデザイン、製造までをデザイナーと職人が同じ空間で完結させるものづくり、自社工場で作られた商品がブランドコンセプトに基づいて設計された店舗で販売されるファクトリーブランドの全貌を研修を通じて理解する。

ファクトリーブランドについて理解するためはファッション産業の理解が不可欠である。近藤ニットでの研修の前に都内近郊のアパレル業界の現場や関係者などを訪問し、ファッション業界について見識を深め、ファッション業界の流通の仕組みや商習慣などについて理解する。

到達目標

アパレル業界の現場や関係者との交流を通じてアパレル・ファッションに関するコミュニケーション能力を向上させるとともに、ファッション産業への理解を深め、業界の現状や展望について自分なりの意見を持てるようになる。山梨から国内外に発信しているファクトリーブランド「evam eva」の経営・運営・モノづくりなどを理解し、グローバル・ローカルな視点を養成する。研修を通じて様々な場所へ訪問、様々な人と交流、実体験から既存の考え方に捉われないファッション業界の新たなキャリアを切り開いていける視野を身に付ける。

期間／スケジュール

第１週	令和2年2月12日 ～2月14日	アパレル業界の現状を知る①（東京）
第２週	令和2年2月17日 ～2月21日	アパレル業界の現状を知る②（東京）
第３週	令和2年2月25日 ～2月28日	近藤ニット本社および工場研修（山梨）
第４週	令和2年3月2日 ～3月9日	evam eva店舗研修・事後教育（東京）

成果と課題

【成果】 科目のねらいの通りに学生のアパレル業界への構造や現状などの理解を深めていくことで、個々の学修スタイルの見直しや、大学生活での取り組むべきことなどが明確になった学生もいれば、とにかく何かを始めたり、スタートさせることを目標に、今までやりたかったことに対して動くことから始めたいという学生もおり、今後の学修の質向上、学修への意識向上に対してアプローチが出来ていると感じた。グローバルに活躍するためにまずローカルの特徴や優位性を意識・把握すること、アパレルの現状を理解した上で学生自身が将来どのようなフィールドで勝負し、そのために何をすべきか、プログラムに対して各自で決めた目標や将来構想に対しても何かしらの答えやヒントを見出している学生が多かった。履修学生全員が自分自身の将来やキャリアをと結び付けて考えること出来たのは、多くの卒業生の就職先であるアパレル産業の現場に赴いて、体験を通して実情を理解することで、これまでの大学での学修内容は仕事をしていくうえで重要と考えられたという部分も大きかったと考えている。

【課題】 学生のモチベーションやコミュニケーション能力の低下を感じた。現場に赴いて話を聞いていても的を射たような的確な質問や学生自身の興味を持った内容に関しての質問が少なかった印象がある。さらに受け入れ企業である近藤ニット株式会社担当者とのヒアリングや評価報告書の内容を見ても、本年度はモチベーションややる気があまり感じられない等の厳しい評価を受けたこともあり、インターン先である受け入れ企業側は学生への教育や指導、生活の補助という負担が大きく、継続していくためにも受け入れを通して企業へのリターン、メリットを少しでも大きくすること、受け入れ先企業への就職を希望している学生を選定するなどの方策を講じる必要性があると感じる。

所属学部学科 | 服装学部　ファッションクリエイション学科

▶履修の目的･目標

ファクトリーブランドとは何なのか、数多くのファクトリーブランドが失敗している中、近藤ニットが成功していると言われている要因をこの研修を通して探していきたい。また、学校ではなく実際の現場を通してなぜアパレル不況と呼ばれる時代に陥ってしまったのかをこの研修で少しでも理解し自分なりに考察をまとめられるようになりたい。

▶研修で最も印象にのこったことについて

最も印象に残っている事は、話を聞いて多くの人が「分業化」と「コスト構造」についての苦言をしていた事だ。この2つについては、アパレル不況と呼ばれる現代において必ず解決しなければならないということに気付かされた。分業が進んでしまった大きな原因は、アパレル業界が「売上を上げたい、利益を上げたい」と後先考えずにビジネスに走りすぎてしまったことだと思う。いかに人件費を抑えて大量生産するかが重要視され、そしてこれが原価率がどんどん低くなっている原因につながる。全てのアパレルで分業化をなくすのは不可能であるなと実感したが、全ての工程を一貫している近藤ニットでは他社に比べて原価率が高めである。またセールは一切なく、その分発注した分はほぼ売り切るという無駄のない生産がされている。大量生産大量消費が普通となってしまっている今、この売り方が理想的なのではないかと思った。

▶研修を通して気づいた事・学んだこと

多くの他ブランドがファクトリーブランドとして失敗している中、evamevaが成功していると言われている要因として私が考える答えは、近藤社長がもともと別事業で仕事をしていてビジネスに対する考え方がアパレルとは違ったこと、奥様である尚子さんの実家が大きな工場を持っていて、更には尚子さん自身がデザイナーであられるという事ではないかと思う。たくさんの企業のお話を聞いて思ったことは、工場だけを持っている人つまり、服や繊維の専門知識だけ持っている人でも、営業、金融、外交など他の知識が付加価値としてないと、ビジネスとしてアパレルは成功しないという事だ。つまり、自分達で作って自分達で価格を決めて売りたいという願望があるだけでは、ファクトリーブランドは成功する事ができなく潰れてしまうか、結局自分達が出来ない部分を他の人の知識でカバーする分業というシステムに逆戻りしてしまうのだなと感じた。

▶今後の学生生活に生かしたいこと

このプログラムを通して私は今のアパレルの現状を理解し、その事について考えるという事がしっかり出来たと思う。普段の学校生活では、服をデザインして作ったりはするが、現実的にコストの事まで考えるのは知識が少なくて出来ないし、洋服については他の服好きの子より詳しくなれるが、業界で働いている大人ほどアパレルの現状を理解できるわけでもない。だが実際、工場の方の話を聞いてみてもアパレル企業の人はあまり作り手である工場側のことを理解していないように感じた。色々な企業の方から話を聞いてアパレル業界には様々な職種があってきっと私がまだ知らないような仕事も沢山あるのだなと思った。私はその中で自分の服飾の知識が付加価値となるような現場で働きたいと思うようになった。今後の学校生活では、学生のうちにいくつかインターンシップに参加していろいろな現場に触れてみたいと考えている。

〈梅春〉カットソーの製造現場

東京
山形

授業概要

本学では、扱うことが少ないカットソー（Tシャツ、パーカ等）であるが、商品企画においては不可欠のアイテムである。

このカットソーの企画から製造までのプロセスを理解するため、企画および製造の現場に入って研修を実施する。研修先は、カットソー製造企業の株式会社ナカノアパレルで、東京小伝馬町の東京事務所で企画の概要や素材、製品に関しての講習と山形工場での製作に関する実技研修を行う。

到達目標

本講座では、世界的に高い評価を得ている日本国内の製造現場で研修することにより、グローバルに通用する創造力とは何かを認識してほしい。具体的には、カットソーの製造現場で織物（布帛素材）とは違う、編物（ジャージ素材）の特性を理解し、布帛とは違う縫製機器や専用アタッチメントなど実際に体験することでカットソーアイテムのデザイン提案力を身につける。

期間／スケジュール

2月10日（月）	事前研修（大学施設）	・アパレル産業の現状 ・最新のデザインワーク ・カットソーの市場調査等
2月12日（水）		
2月13日（木）		
2月14日（金）		
2月15日（土）		
2月16日（日）	移動（東京→山形）	
2月17日（月）	工場研修（1）	カットソーの先端技術を学ぶ
2月18日（火）	工場研修（2）	
2月19日（水）	工場研修（3）	
2月20日（木）	工場研修（4）	
2月21日（金）	工場研修（5）	
2月22日（土）	移動（山形→東京）	
2月25日（火）	本社研修（1）	ＯＥＭ等の企画を学ぶ
2月26日（水）	本社研修（2）	
2月27日（木）	本社研修（3）	
2月28日（金）	本社研修（4）	
3月2日（月）	事後研修（大学施設）	・研修のまとめ ・大学での今後の研究 ・報告書作成
3月3日（火）		
3月4日（水）		
3月5日（木）		
3月6日（金）		

成果と課題

本プログラムを実施した学生からの反応は、漠然と想像していた服づくりが、現場で素材から裁断・縫製・検査・出荷と具体的に製品になるプロセスを見て多くの人の手を経て製造されることに驚くとともに、厳密な工程管理、時間管理と周りの人とのコミュニケーションの大切さ痛感したようである。研修後においては、教員の問題提起に対し現実的な議論ができるようになった。

受け入れる工場の問題としては、研修期間が2週間と比較的長期にわたるので規模の小さい工場では、学生の面倒を見ることに負担を感じるところもある。学生からは、実施期間が春休みにかかるのでアルバイトができないという意見が出ていた。

このようなプログラムを外部の企業や組織と実施するためには、普段からお願いする企業・組織と情報交換等の連携を通して信頼関係を築いておく必要がある。

総括と今後の展望

本講座は、専門課程に進む前に激変期にあるアパレルの現状を現場に入り実感してもらい、自身の進路、研究にフィードバックしてもらうことを目的に研修内容を決定した。社会が大きく変化する時は、実社会の現場を知ることが何より大事であるが、製造の現場は、アパレル関係者さえも現場のことを知る人は少ない。パラダイムシフトと呼んでもいいくらいの変化の渦中にあるアパレル産業であるが、将来アパレルの企画や販売の仕事に就いたときに製造のことを理解していることで精度の高い議論ができるようになってもらいたい。また、現実を知ることにより、時代の変化を身近に感じるようにもなってもらいたい。

本講座の開設にあたっては、研修先企業との打ち合わせに併せて、研修先の自治体（県、市）とも協議し、自治体が提供しているインターンシップ制度（研修学生の現地までの往復交通費の半額を支援）を紹介いただき活用した。学生の経済的負担の軽減になり、今後も活用したい。

教育効果としては、やはり早いうちに現場を経験させることに尽きる。現場の中で何をすべきか、周囲とのコミュニケーション力も問われる、まとまった時間に集中して現場を体験することの意味は大きい。

研修の中では、自分のデザインしたアイテムを制作させてもらい、プレゼンし現場の人からの講評もいただいた。また、商談の席にも同席させていただき、メーカーは何に注目して製品開発を行っているのか、同時にコミュニケーションの大切さ、企業間の信頼の上で仕事が成り立っている重要性を学ぶことができた。このプログラムは、教員の研修にもなると確信しているので、今後も若手教員を中心に現場に入り、信頼関係を築き産学協同のプロジェクトとしてアップデートを重ねてほしいと思う。

所属学部学科 | 服装学部　ファッションクリエイション学科

▶履修の目的･目標

自分の履修目的は三年次になるに向けての良い材料にしたかったからです。自分の将来の選択肢の中に商品企画があったので、実際にこの目で確かめたかったですし服のデザインを考える以前に工場や本社ではどのような作業があって、どのように服がつくられているのかもしりたかったので参加しました。目標はカットソーの現状などを知りそこで学んだ知識を今後どのように生かし、現代的で新鮮な物づくりにつなげるかを目標としました。

▶研修で最も印象にのこったことについて

山形で最も印象に残ったことは作業工程の種類の多さに驚き、印象に残っています。自分はカットソー工場を見るのが初めてで、どのような工程で服が作られているのかを深く知りませんでした。ただ布を買って、切って、縫うのではないかと思っていましたが、布を検反する工程や延反があったりなど学校では実際に見られない様な作業を見れて印象に残っています。東京の方は営業とデザイン提案が印象深いです。営業はイトキンさんにお邪魔させていただきました。少し緊迫した場面もあり、よりリアルな体験をさせていただき印象に残っています。そして、デザイン提案では自分なりにプロの方々にプレゼンテーションしました。以前にデザイン提案をする様な授業をやったことがあったので少し余裕な気持ちでやってみましたが、欠陥ばかりでした。本気で評価して下さり、厳しい意見もいただきました。ですが、本当に自分の為になったので印象に残っています。

▶研修を通して気づいた事・学んだこと

気づいたことも学んだことも数多くありました。作業工程もそうですし、上下関係のことなど服以外のこともです。山形で気づいたことは一人一人明確に意見を言っていて、意識の高さに気づきました。一つの工程で狂ってしまうとどんどんその後の工程に支障が出てしますからだと思い改めて服作りの大変さを学べました。それと自分達は作品制作で何本も針を折ってしまいました。その度に折れた針先を探す作業や検針もしていて、針の重要さが知れました。製品に一かけらでも入っていれば大問題で、一瞬で信用などがなくなってしまうことも学べました。東京の方はナカノアパレルさん独自のお客様の対応やコストに関わることについて学べました。用尺といった布を使う目安やロス率などは全く知らなかったので為になりました。そして営業では緊迫した場面がありましたが、最後には良い雰囲気で終わっていて、プロのすごさに気づかされました。

▶今後の学生生活に生かしたいこと

生かしたいことは服を作る技術は生かしたいです。山形ではパーカーとトレーナーを作り東京ではＴシャツを作りました。山形ではパターンをお借りしましたが、東京ではパターンを一から書いたので本当に生かせると思いました。特に三年生はファッションショーで衣装製作があるので大いに生かせそうです。それとデザイン提案も自分にとっては生かせそうです。どのように売れるものをデザインすれば良いかなどを教えていただくなどキャリアデザインにもつながるところもありましたったので生かしたいです。課題は多く出できたと思います。特にもっと深く知ることが大切だと思いました。将来アパレルに就職したら当たり前のように用尺やロス率など知らないといけないと思いました。今回のインターンで失敗したことや不十分だった所を問題解決し、今後、将来に生かしたいと思います。

〈梅春〉染めによる着物デザイン

新潟

授業概要

着物の総合生産地である新潟県十日町市にある株式会社きものブレイン社で着物の構造、染色、仕立て方やプレタ着物製造のプロセス、着物のアフターケアの理解と体験を通して日本の着物産業について体験を交えた企業研修を2週間にわたり行う。

到達目標

・着物の歴史について理解し、基礎知識を身に付ける。また、着物産業の現状について調べることで自ら問題点に気づき、特別講義やディスカッションを通して解決策について考えることができる。
・着物の総合生産地である十日町市で伝統文化や着物に触れることで、ものづくりに対する思いを感じることができる。
・伝統的な着物の染めの技術や現代的なアフターケア技術を実際に体験し、日本の伝統文化をより深く理解することで世界に向けて発信できる力を養う。

期間／スケジュール

事前教育期間	企業研修期間	事後教育機関
令和2年2月12日（火）～14日（金）	令和2年2月17日（月）～2月29日（土）	令和2年7月25日（土）※ON-LINE開催
■研修シラバス配布・会社紹介・研修流れの説明 ■特別講義・ディスカッション・着物について基礎研修 ■1/2サイズの着物のオリジナル柄制作	■株式会社　きものブレイン　企業研修	■研修内容の報告・ディスカッション・プレゼンテーションの準備 ■プレゼンテーション、個人報告書まとめ・提出 ■研究についての振り返り

成果と課題

株式会社きものブレインでは、着物の製造から流通にかけて一連の流れとアフターケアを体験することでプレタポルテの着物産業を体験することが出来た。事前教育ではきものの歴史について特別講義を受け、着物に対する知識を深めることが出来た。さらに、浴衣のオリジナル柄をイメージソースから考え、イラストレータで柄データを製作し、1/2縮率で浴衣柄を布地に印刷し組み立てることで、浴衣の構造について学ぶことが出来た。この学びにより、従来のものを大事にしながら新しいものへ発展させる感性を磨くことが出来たと考える。なお、友禅染の研修でも下絵のデザインから自分で発想し、色を入れる全工程を学ぶことで、染に関する基礎知識や体験から、日本の文化のすばらしさを再確認することが出来た。株式会社きものブレイン社では、きもの産業が直面している問題について学び、きもの文化の活性化についてのディスカッションを行うことで問題意識を高めることが出来た。

総括と今後の展望

・着物の歴史について理解を深めるだけではなく、着物の柄をオリジナルデザインしながら今時の感性で着物を捉えることでもっとカジュアルに着物に接することが出来た。着物の柄を発想からデザインし、布地にプリントして組み立てることで着物の構造をより理解し、イラストレーターやインクジェットプリンターなど範囲を広げて学べるように工夫した。

・企業研修時に発生する、計画していない費用が発生する場合はあるが、その場合を想定して事前教育で説明を行った。新潟十日町市より補助金を頂いているので、補助金で賄うことが出来ることを学生に伝え、理解をしてもらった。

・自分のキャリアーデザインに大きく影響を与えることがわかった。会社に身を置いて社会生活を送ることで自分が目指したい将来を具体尾的に見出すきっかけになっていることが分かった。1年生の時期に自分のキャリアーデザインについて考えることは今後の大学生活に大いに役に立つと考える。

・本プログラムが学生にとって貴重な経験となり大学生活をより効率的にデザインしていることは間違いないと考える。教員としても会社とのつながりを築くことができ、長い目で見れば大学としては有用なプログラムであると考える。研修期間が4週間である必要があったために、企業での研修期間が足りなく、事前教育と事後教育で2週間分を賄うことにしていたために、その事前と事後のプログラムのデザインで大変な部分はあったが、学生の満足度も高かったこともあり継続して展開しても良いと考える。ただ、プログラムの数は選定して、少し減らしても良いのではないかと考える。

所属学部学科 | 現代文化学部　国際ファッション文化学科

▶履修の目的･目標

成人式の振袖を選ぶ機会が、着物に興味を持つきっかけとなりました。私は、多くの振袖や帯を見る事は初めての経験でした。金銀の刺繍や華やかな染、絞りなど、その繊細な装飾に目が釘付けになりました。その後、着物が好きな祖母を訪ね、小紋や紬などの着物を見せてもらいました。普段着の着物も、振袖とは違う柔らかな魅力がありました。もっと多くの着物に触れ、和服の奥深さや魅力を学びたいと思いこの研修を履修しました。

▶研修で最も印象にのこったことについて

この研修を通し、着物はとてもエコなファッションである事を知りました。また、そのエコのサイクルを守るため、専門職の方々が技術を出し合い、支えている事も知りました。この２つの事が、私がこの研修で最も印象に残っている出来事です。

着物がエコなファッションであるという事を示す代表的な例として、「縫い代を裁ち落とさず、着物の形に製法する事で、反物に戻し仕立て直しが行えるため、サイズの調整や汚れを隠す事などを可能にする工夫」がある事を学びました。また、着物として着用する事が出来なくなった物は、座布団のカバーに作り替えたり、燃やして灰になった物を焼き物の釉として使用したり、最後まで無駄なく利用する事も学びました。これら工夫は、江戸時代から続いていると知り、驚きました。そして、きものブレイン社では、このエコのサイクルにおける、専門的な技術を実際に見学する事が出来ました。それは、とても貴重な体験でした。

▶研修を通して気づいた事・学んだこと

見学した中で、特に気づきを得た部署が３つあります。

１つ目は、工芸班です。この部署では、母から娘へ受け継がれた振袖を、流行に合わせ、色を変える作業が行われていました。野暮ったさのあった振袖が、華やかに、そして娘さんの雰囲気に似合う振袖に変わり、感動しました。

２つ目は、採寸班です。この部署では、反物を採寸し、汚れを隠すために、どの部分をどのパーツにするか、計算を行っていました。その緻密な作業は、仕立て直す着物の出来を支える、大切な技術だと思いました。

３つ目は、前検品班です。ここでは、反物の汚れを確認し、縫い代に隠せるのか、工芸により隠すのか、検討されていました。汚れなのか、反物の持つ風合いなのかを見極めるため、膨大な知識が必要だと知り、専門性の高い仕事であると感じました。これらの部署の見学を通し、自分の専門技術を向上させる事のかっこよさを感じ、憧れの気持ちを持ちました。

▶今後の学生生活に生かしたいこと

今回の研修に参加し、今後取り組みたいと思った事は、2つあります。

1つ目は、着物のエコについて調べ、学ぶ事です。1年次の授業の中で、サステイナブルファッションやエシカルファッションなどの言葉を耳にし、私にとって、エコなファッションは関心の高い分野になりました。そのため、環境に優しいファッションについて、考えていく過程に、着物におけるエコの工夫を学ぶ事は、参考になる事が多くあると感じました。

2つ目は、着物の繊細な装飾や仕立てを学ぶ事です。着物のデザインを洋服に用いる事は面白いのではないか、と考える事がありましたが、着物のデザインの知識が無く、挑戦出来ずにいました。研修の期間、多くの着物を見る機会があったので、その中から特に自分が興味を持ったデザインについて調べ、知識をつけたいです。

研修での学びを、和裁の分野により興味を持つきっかけとし、そしてまた洋裁の分野にも繋げていけるようにしたいです。

〈梅春〉素材からの商品企画

東京
新潟

授業概要

本講座では、アパレル業界における布地の製造、企画、生産、販売までの一連の流れについて、実際の現場を学び体験し、その成果としてオリジナルのテキスタイルで商品企画を行う。マツオインターナショナル株式会社（東京）で、企画書や生産のプロセス、また販売方法や戦略などについて学ぶ。特に布地の製造にていては、株式会社匠の夢（新潟）で素材から学び、実際に布地が織られる現場を見学する。また、織機を用いてオリジナルのテキスタイルを製作する。その他に、新潟県見附市でニットの製造工場や布地の整理加工業などの工場見学から産地を学ぶ。最後に、学んだ知識を生かし、オリジナルテキスタイルから商品の企画書、商品製作、最終プレゼンテーションを行うことで実際のアパレル業界の流れと、もの作りの現場を理解する。

到達目標

本学の長期学外学修プログラムはコミュニケーション力、伝統・文化理解力、グローバルキャリアデザイン志向をもった「グローバル創造力」の育成を目的としている。商品企画、生産、販売の現場について、それぞれの専門の現場を体験することで、今後の日本のモノづくりについて考える。また、それぞれの専門職の方と積極的にディスカッションすることで、自ら考え、意見を発信する力を養う。織物については、素材からテキスタイルデザインまでを深く学び、伝統的な技術から最先端の見せる生産現場を視察する。また、研修で得られた知識や体験を生かし、商品企画、製作、最終プレゼンテーションを行う。この一連の流れから、日本のモノづくりの現場を理解し、自らの思いや考えをまとめ、発信する力を養成する。

期間／スケジュール

第１・２週	株式会社匠の夢(新潟)で素材からテキスタイルに関する講義や、実際に布地が織られている現場を見学し、糸から反物への製造過程を学ぶ。また、オリジナルでデザインした布地を製作する。産地である新潟県のニットの製造業や整理加工専門の企業等、工場見学を行う。
第３・４週	マツオインターナショナル株式会社(東京)で企業、ブランドについての概要説明、企画・生産・営業・管理部門についての研修、アパレル企業の仕事内容や販売の現場を知る。また、実際に商品企画を行い、企画書、商品製作、プレゼンテーション資料の作成を行う。商品企画では、ディスカッションを繰り返し、商品の改良や人に伝わるプレゼンテーションスキルを学ぶ。また、アパレルに関する全般の内容について課題を取り上げ、ディスカッション形式で自ら考え、人に意見を伝えるという姿勢を学ぶ。最後に研修の集大成として、商品企画プレゼンテーションを行い、企業の方などに意見をいただき総まとめを行う。

成果と課題

本プログラムの学生履修理由は、昨年、他のAPプログラムを受講し、テキスタイルに興味がわいた、服の商品企画について現場で学びたい、大学の授業で科目ごとにバラバラに得ている知識を商品づくりの１つの流れに沿って学びたいなど様々であった。このプログラムでは、実際の産地新潟で日本のモノづくりの現場を体感し、キャンパスでは体験できない非日常から刺激を受け、普段以上に熱心で真剣に取り組む姿勢が生まれている。また、現場のプロフェッショナルの仕事を目にし、人々と触れ合うことで仕事としての意識を持ち、自身のキャリアを考えるきっかけともなっている。東京研修では、ディスカッションを主に、アパレルの現状など、いくつかのトピックスについて自ら考え意見を述べる機会を持ち、またパタンナーやデザイナーなどの専門職の方から仕事への取り組み方や考え方などの講義を受け、普段行っている自身の製作過程との違いを感じ、キャリアとしての視点を持つことができた。最後にオリジナルテキスタイルで服と雑貨の商品企画から製作までを行い、今まで大学で学んできた専門知識のピースが一つの流れとしてつながることで、今後の課題を発見し、プロとしてのモノづくりを意識するきっかけとなった。また、商品企画プレゼンテーションでは、自分の言葉で人に伝えることの難しさを体感しつつ、企業の方の講評を受けることで、客観的に自身を振り返ることができた。学生たちは、この研修を通して、自分に足りなかったこと、また自分では気づかなかったことに気づき、今後の学生生活に新たな目標や夢を持てたといえる。

例年、今後の課題としてこの体験から学んだ知識や感動をどう生かし、持続させるのか、大学の教育カリキュラムでその方法を模索する必要があると述べている。今年度、昨年度受講した履修生から、受講から1年経過した現在についてヒアリングをしたところ、自らインターンシップに参加するという積極的な姿勢が生まれた、テキスタイルへの関心が強い、就職も専門職であれば地方を視野に入れたいなど、継続した意欲が感じられた。この様な研修後の学生ヒアリングなど、他のプログラムの学生達も交え、意見交換会など、カリキュラムとして事後のフォローを行うことも大切だと感じた。

総括と今後の展望

・本プログラムは、令和2年度で3年目となり、また本年で実施最終年を迎えた。履修した学生は、3年間で10名に上り、履修学生傾向として、本人の学びたいという意志や向上心が強く、積極的な姿勢が見られ、学習効果大変高かったと感じる。

・初年度よりこのプログラムを主導してくださったマツオインターナショナル株式会社の高倉氏は、学生が「自分の頭で考える」こと、「人が感動するモノづくり」とはなにかということをテーマに掲げ、4週間という長期間のスケジュールを提案してくださった。3年の間、他大学の教員や他の企業の方など、その年度ごと、常に新しい方を一緒に巻き込みながら、変化のある研修を考えてくださった。この研修は、高倉氏が4週間、常に学生に寄り添いながら進めて下さり、また、受け入れてくださった企業の方も業務を抱えながらの実施で、大変なご苦労があったと推察する。

・学生が1，2年次に梅春学期を利用し、4週間の学外学修を行うことは大変有意義である。新たな学年へ進む前に、知識を学び、現場を体験できたことはもちろんだが、社会を知ることで、今後の目標や夢を明確にし、今自分に足りないものは何なのか、興味関心をどんなところに持てるのか、今まで気づかなかったことに気づくことができる。また世の中の流れを把握することの大切さ、人との出会いや縁に感謝する気持ちを養うことができると考える。また、大学の講義で学んでいる１つ１つが、産地や企業など、実際の社会の現場でどのように役立つのか、その内容を体系的に把握することで、学生の今後の学びの姿勢も大きく変わると考える。

＜その他＞

・産地（新潟）での研修費用について：学生の新潟研修の際に、企業の方から宿泊費（新潟県見附市商工会）や交通費（新潟県）の補助制度をご紹介頂いた。新潟研修は約2週間であったため、学生の金銭的な負担が大幅に削減された。

・産地研修（新潟）での学生の様子の把握：産地（新潟）での研修は2週間行われたが、その際、教員が引率できる期間も限られているため、東京から学生の状況把握を行うため、スマートフォンのアプリLINEを利用した。学生は研修中、毎日報告書の記入を行うため、その内容を日々写真でアップしてもらい、活動内容の把握や合わせて体調などの状況把握を行った。また、高倉氏のご厚意で、LINEを使い、毎日の学生の様子を写真などで送って頂いた。

最後に、このプログラムは、マツオインターナショナル株式会社の方々をはじめ、株式会社匠の夢、新潟で見学を受け入れてくださった工場や施設の方々、見附市商工会、見附市役所、それ以外にも関わって下さったすべての皆様のご協力なくしては成立しなかった研修です。皆様が学生のために貴重な時間を費やし、技術や知識を惜しげもなく与えてくださったことに心より感謝申し上げます。

所属学部学科 | 服装学部　ファッションクリエイション学科

▶履修の目的･目標

以前からデザインに合った素材選びや、素材からデザインを考える事に興味があった。また、前回のＡＰでテキスタイルに関わる仕事に興味を持ったため、今回はテキスタイルについて知識を深められるプログラムを履修しようと思った。そして、作品ではなく商品、ビジネスとしてのものづくりという点で、これまで深く考えることがなかった内容を学ぶこのプログラムを通して、自分自身の視野を広げたいと思い、履修した。

▶研修で最も印象にのこったことについて

印象に残った事として、オリジナルテキスタイル制作からの商品企画はもちろんだが、見附での研修では匠の夢の原さんによるテキスタイルの説明が特に印象に残っている。説明の際、布地を触らせて頂いたため、組織や糸の違いで風合いがどう変化するのかなど、自分の感覚で確かめながら理解できたてめとても勉強になった。次に、工場見学で訪問したＳＵＷＡＤＡが印象に残っている。オープンファクトリーということで、洗練された外観や内観、見せるにこだわった工場に感動した。時代に合わせて進化する姿勢の重要性を強く感じた。

また、東京での研修では、マツオインターナショナルのパタンナー、デザイナーの方にお話を聞いた事が特に印象に残っている。パタンナーの今村さんもデザイナーの安さんも共通して、仕事に対して情熱や愛情を持っていて本当に素敵だった。私も志高く、真っ直ぐ好きな事に向き合う人間になりたいと思った。

▶研修を通して気づいた事・学んだこと

一日の研修の冒頭で行う、高倉さんによる頭の体操では、ファッションに関する事だけでなく人生において大切な様々な事を教わった。その中で、一つの事象に対して高倉さんは必ず「どう思う？」と聞く。これ対して最初は、答えなきゃとばかり思っていたが、繰り返すうちに、何事も自分で考える癖をつけることが大事なのだと思うようになった。

研修全体を通して、現代のものづくりでは、ブランドでも何でも、現状維持では続けていくことは難しく、新しいことに挑戦しようとする積極性が大事だと学んだ。そのためには人生における夢や目標を明確にすること、常にアンテナを張って世の中の流れを把握すること、人との出会いを大事にすることが必要だということがわかった。

▶今後の学生生活に生かしたいこと

これまでの自分は人と話すことが得意ではないと思い、気の合いやすい人とばかり一緒にいることが多かった。しかし、将来の仕事に結びつけていくためには、考え方の違う人などを含め、もっといろんな人と関わる必要があると思った。また、自分のことも他人のことも、決めつけず柔軟な考えを持つ必要があると思った。

次から三年生になる自分にとって、夢や目標を明確にすることは早めに行動しなくてはいけないことだと思った。今のところやりたい事や興味のある分野が多すぎて明確な夢や目標が持てずにいるが、きちんと向き合って自分が将来どうしていきたいのかよく考えようと思う。また、興味の有無に関わらず将来のために様々な知識を身に付ける必要があると思う。学生のうちにもっといろんな分野にアンテナを張り、知識を蓄えて行きたい。

〈梅春〉ハイブランドの製造現場

東京

ー高級既製服の仕立て技術を学ぶー

授業概要

後期試験終了後から春期休暇までの４週間にわたり、ハイブランドの製造現場を学修する。ハイブランドの縫製方法を市場調査し、また、東京都杉並区にある有限会社ファッションしらいしにて製造現場を体験する。

到達目標

ハイブランドの市場調査や約４週間にわたる製造現場を体験することで、アパレルの現状を知り、ファッションを中心とした分野で発揮できる能力を養う。

期間／スケジュール

第１週目	裏地のきせアイロン、表地のヘムアイロン、スリップ止めつけ、共布詰め　等
第２週目	板締め、染め前のしつけ、特殊ミシンでのボタンつけ、パターンチェック　等
第３週目	ファスナーの長さ調節、パターンの整理、サージング、ノベルティのティッシュケースにティッシュを詰めるパターンチェック　等
第４週目	後ろ見返しロックミシンかけ、裾しつけ、パターンチェック　等

成果と課題

４週間にわたる縫製工場での研修は、大変有意義であったと考える。パターンの整理からチェックの仕方、また商品製作に関わる仕事の補佐を研修させていただき、履修学生からは大変勉強になったと報告を受けた。

今年度履修学生は、卒業後いずれ自身のブランドを立ち上げたいという希望である。企業の方は、そのことを学生から聞き、デザイナーはどのように縫製工場とやり取りをすべきか、将来を見据えたことも教授してくださり、学生にとって大変実りある研修であったと考える。

挨拶をする、始業時間より前に行く、休まない、コミュニケーションを積極的にとるなど、社会人としてのマナーも研修の中で得られたようである。また、自分の技術や知識の不足も感じたようで、次年度の授業履修においても目標ができたと話していた。出来ないことが分かることで、これからの学生生活をどのように過ごすべきか考えることにつながっていた。これからの学生生活の目標が明確となり、より一層学びを深めることになると考える。また、仕事の場に関わったことで、自身の目指すデザイナーとしてどのようなキャリアデザインを設計すべきか考える大きなきっかけになったと思う。

長期間の研修ではあるが履修学生は、４週間もあっという間だったと話しており、充実していたことが伺える。縫製工場の現状と課題、企業の取り組みを体感でき、縫製業をはじめファッション業界に興味関心の視野が広がったと考える。

次年度も同期間での研修ができるよう、企業への協力をお願いしたいと考えている。

総括と今後の展望

このプログラムは、実際の縫製工場での仕事を経験させていただくことに重点を置いている。現場での研修は、大学の座学や実習では感じることができない「仕事とは」ということを学べるプログラムになっていると考える。プログラムのために実習内容を決めるのではなく、伺ったときにある仕事を実際に研修させていただいている。どの仕事も商品に関わるため、責任を持ちつつ研修ができ多くのことを学び・吸収できるプログラムである。

運営においておこなった工夫としては、履修学生は面談をして決定をした。研修の内容を理解しているか、何を学びたいと考え履修を希望したのかなど面談をすることで学生の意欲の高さを判断した。また、面談時間に遅れることなく来られるか等基本的なマナーもその時に確認・判断した。

履修が決定した学生とは、研修実施までに何度も連絡をとるようにした。研修企業の調査や自社ブランドを見に行くよう課題を与え、学生の気持ちを高めることに心掛けた。企業へは、履修者の決定や実施についてのお願い等も含め、出来る限り連絡を取り研修がスムーズに進むよう努めた。

問題点は、研修時教員が立ち会う事なく学生のみになることである。しかし、そのことは学生と研修中も連絡をとり、現状を報告してもらうことで問題が起きていないか困っていることはないかの確認をし、また、企業にも学生の研修状況をその都度確認することで、両者とも問題なく進められるよう改善を図った。

このプログラムは、実際の仕事を体験できることで学生の学びの姿勢を変える教育効果があると考える。大学での学び＝仕事になっていない学生が多いが、このプログラムを履修すると、自身のキャリアデザインをどのように設計したらよいか考えるようになったや描く将来のために不足している自身の知識や技術が知ることができた等の社会を意識した考えになることが分かった。また、不足していると分かったことが、これからの大学での学生自身の目標になるため、学びの充実につながると考える。

今後も、引き続き企業の方の協力を得て継続して実施できると回答を頂いている。学生の学びたいという意欲が、企業の方に伝わりお忙しい中その意欲に応えて下さっている企業の方のおかげで、受講学生の満足度が大変高い。実施時期は、今まで行っている時期が企業も受け入れやすいことから、繁忙期等にかからないような時期の設定も重要である。

これからも企業と相談しつつ、学生にとって学びの多い研修になるよう継続していければと考えている。

所属学部学科 | 服装学部　ファッションクリエイション学科

▶履修の目的･目標

僕はデザイナーになるのが夢なので、人生の中で、縫製工場で働くというビジョンは持ち合わせていません。しかし、僕がもし本当に夢を叶えられたとしたら、縫製工場にお世話にならなければ、多くの服を作ることは不可能です。そのため、僕はその縫製工場の人々の気持ちや働き方、仕組み等について知っておきたいと思ったのが目的の一つです。また、ダイレクトにいえば、ハイブランドという言葉に惹かれたため履修しました。

▶研修で最も印象にのこったことについて

印象に残ったことは、自社ブランドを持っている点で、他の縫製工場とは、群を抜いて優れていることです。いきなり伊勢丹で販売を開始し、成功したのは驚きでしかありません。自社ブランドを持っているので、服のデザインから素材選び、接着芯の選定、またタグ作りなど細かい作業もこの縫製工場だけで行っています。作っているお受験服は、あくまで保守的でなければいけないといいます。流行りに乗っかりデザインを変更しても売れません。お受験なので、どれだけ品が良く見えるかが大切です。実際に売り場に行き見てきましたが、他のブランドと比べて格段に素材が良いと感じました。伸縮性・通気性等の機能がとても優れていると思いました。実際専務に話を伺うと、素材は社長が主体となってこだわり抜き、この素材を用いているのはしらいしさんだけであり、頼んで作ってもらっているといいます。何についても手を抜かない「ファッションしらいし」に対して本当に尊敬します。

▶研修を通して気づいた事・学んだこと

縫う際パターンは線が少なく綺麗な方が見やすく、ノッチは少ない方が布地に負担をかけなくて良いと思っていました。しかし、一番に考えるべきことは、いかに綺麗な服に縫い上げられるかの観点であると学びました。そこで、ノッチは曲線の強い袖縫いでは２分の１ノッチつまり、合印と合印の間にノッチを追加する事を教わりました。また、まち針を使わないのも驚き、量産では早く正確にが大切で、経験がものをいうのでまち針は非効率的であります。

縫製工場は、デザイナー・パタンナーが各々の仕事をした後、それを受け取り、裁断・縫製を行う場所であると思っていたので、委託されたものを完成させるだけだと思っていましたが、実際はそれをまず先上げとして一着縫い上げ、頼まれた仕様書を元にシルエット等を直し、パターンの修正なども行い、委託先に提出し、相談しながらさらに手直しを加える過程です。つまり、縫製工場の人は縫いだけの知識だけで成り立たないのだと学びました。

▶今後の学生生活に生かしたいこと

今回の実習で、今まで僕は言われた通りにただ指示通り動き、服を作っていましたが、専務が「これは、こういった理由であるんだよ」「こうするために作るんだよ」など、論理的に指導してくださったので、今まで曖昧だった知識が断定的な知識に変わり、応用がきくまでに成長できたと思うので、この知識を糧に、今後の作品作りでは、しらいし直伝の方法でのパターン作り・縫いを行っていこうと思います。また、誰にでも失敗はあるので、その時にどう対処するのかその練習もしておくことの大切さも知ったので、もし失敗した時には、どうゴマかそうではなく、綺麗にやり直しができるように、あきらめない心で何事にも取り組みたいと思います。

僕は夢を実現させ、しらいしさんに今度は仕事の依頼でお世話になりたいです。これが、最大の恩返しになると思います。知識を増やすために、授業は一つも無駄にできません。第一歩としてこれからは、皆勤賞を狙おうと思います。

〈梅春〉ファッション企業研修

東京

授業概要

本授業は後期期末試験終了後を梅春学期と設定し、国内ファッション系企業で４週間のインターンシップを行う授業科目である。ファッション系企業の業務内容や仕事の進め方、企業内の様々な職種やそれらの業務内容を習得する。実施時期は２月下旬から３月中旬の４週間である。

到達目標

大学在学中に４週間の長期にわたり企業インターンシップを体験することで、仕事をすることの意味や意義を理解するとともに社会人として求められる主体性、行動力、課題発見力やコミュニケーション能力を身につけることを到達目標とする。

期間／スケジュール

第１週	令和2年2月17日（月）～ 令和2年2月23日（日）
第２週	令和2年2月24日（月）～ 令和2年3月1日（日）
第３週	令和2年3月2日（月）～ 令和2年3月8日（日）
第４週	令和2年3月9日（月）～ 令和2年3月15日（日）

インターンシップ受入企業は下記の通りである。

・遠藤　波津子グループ　本社
・株式会社　レナウン
・株式会社　スクロール　東京本店
・株式会社ファッション須賀
・株式会社　エトワール海渡
・ドクターマーチン・エアウエア ジャパン株式会社
・株式会社 ファスサンファール
・株式会社東京芸夢

成果と課題

研修に参加した学生からは第一に「仕事や企業とはどんなものなのか」という基本的な理解が得られたという声が聞かれる。大学での今後の学びや就職活動に向けての準備のために参加した学生が大半であるが、日常の学生生活では得られない実体験に基づいた事柄が習得できた事が最大の収穫であった。具体的にはコミュニケーションの大切さや細部まで掘り下げていく仕事への姿勢などが挙げられる。

課題としては学生への意識付けが浸透しきれなかった点がある。事前にオリエンテーションを数回実施し、研修の意義や留意すべき点を繰り返し投げかけているが、実際に研修現場では意識不足の学生も存在した。事前研修プログラムの内容を検討する必要性も考えられる。

総括と今後の展望

本プロフラムの実施に当たっては研修引き受けをお願いする企業の実情に合わせて、各企業で独自の研修計画を立てていただいている。特に現場での詳細な日程などは信頼関係を前提に委任をすることとなる。したがって企業と日常的なコミュニケーションを構築し、インターンシップへの考え方を共有する必要性が高く、これらを心掛けて運営をしてきた。しかし各企業においてはその業種や規模、社風など様々な部分での差異があり、より深い個別の擦り合わせが求められると感じている。非常にタイトな人員体制やスケジュールで業務を進行している部門での研修の場合には、研修担当社員と学生のコミュニケーションが粗くなりがちであり、結果として期待した成果が得られないケースもあった。

上記のように本プログラムは企業の善意に助けられている部分が非常に強い。研修目的や学生の報告を踏まえると成果は大きく、継続の意義は大きい。しかしその前提には大学の関連部門や担当教員が日常的に対象となる企業との連動を強める意識を持ち、そこに割く時間的な余裕をも確保できることが必須条件であると考える。

所属学部学科 | 服装学部　ファッションクリエイション学科

▶履修の目的･目標

ファッションに関連する様々な業種があること、またその業種がどのような業態であるのかを理解することで約1年後に迎える就職活動で就職先を決定する際にこの経験を活かすことができると考えたからです。実際の現場を体験してみないとわからないリアルな企業の内側を知ることで今までとは違った視点で、新たな視点で物事を捉えることができるのではないかと思いました。

▶研修で最も印象にのこったことについて

エトワール海渡は人との繋がりを大切にしているということが研修を進めていく上でとても印象に残りました。エトワール海渡では今の卸業界では珍しい完全会員制を創業当時から貫いていてその全会員の情報がマスタ管理されています。社員は誰でも顧客情報が閲覧、編集できるようになっていて店舗情報や売上高などだけでなくその会員の好みのテイストや時には体調や近況であったりと事細かに情報が共有されています。エトワール海渡としての目先の売り上げだけでなく買い付けに来ている会員の店舗経営のことまでも親身になってサポートする姿が会員からの信頼に繋がり、それが何代にも渡ってエトワール海渡との取引を続ける会員が多い理由だと思いました。信頼を得るためには労力も時間もかかるけれどそれを厳かにしてはいけないとおっしゃっていた社員の方の言葉はビジネス以外のことにおいても一貫して通じるものだと私は思いました。これからの学生生活、また社会に出たときにも人との繋がり、信頼関係を大切にしていきたいと思いました。

▶研修を通して気づいた事・学んだこと

私は今まで卸売業がどのような業態なのか詳しく知らずネットや書籍で調べてもメーカーから商品を仕入れそれをさらに小売店に卸すという基本的な内容しか得ることができませんでした。しかしこの研修を通して卸売業について、エトワール海渡という企業について色々なことを知ることができました。まず一般的な小売店舗と大きく違うのは商品の売り方です。卸でのお客様は小売店でありダイレクトな消費者ではないためお客様の好みではなくそのお客様の小売店にマッチしたテイストや価格帯で商品を売ります。お客様の情報だけでなく店舗の情報も知っていなければ適格な商品を売り込むことができないため小売店以上にお客様のニーズに応えることが難しいと感じました。その中でもお客様との何気ない会話の中で情報を引き出したりリサーチすることで円滑な関係を築いているのだと感じました。

▶今後の学生生活に生かしたいこと

私は今までどのような職業に就きたいか、何をやりたいのかがわからず何かきっかけになればと思い今回このインターンシップ研修を希望しました。研修を通して色々な職種の方々にお話を伺い、実際のお仕事の内容を体験させていただきたくさんの刺激を受け、自分の好きなこと、やりたいと思うことがどんなものなのか、自分自身を見つめ直すことができ、とても有意義なものになりました。今までは知ることがなかった現場のリアルな雰囲気を経験し、新たな視点で物事を捉えることができるようになったのではないかと思います。また、研修生として企業で働かせていただいたことで気づかないうちに飽和していた気持ちが一掃され、初心に返ることができたのでフレッシュな気持ちで新学期を迎えることができそうです。これから迎える就職活動においても意思を強く持ち目標のために今自分は何をしたら良いのか初心を忘れずしっかりと考えて行動していきたいと思います。

〈梅春〉テキスタイルの製造体験

東京

授業概要

後期試験終了後から春期休暇までの4週間にわたり、国内において学外研修を体験する。

文化・ファッションテキスタイル研究所にて、テキスタイルの基礎を学び、生産工程についての知識を深め、テキスタイル製造全般について幅広く体験する。

到達目標

テキスタイルメーカーとして長年ブランドのものづくりを支えてきた文化・ファッションテキスタイル研究所での体験を通して、テキスタイル製造の重要性と面白さを発見する。また、日本のものづくりへの理解を深め、服づくり全体における創造力や発想力を身に付ける。

期間／スケジュール

第1週（2/12水～ 2/14金）：事前研修（学内）	研修先のリサーチ、講義：テキスタイルに関する予備知識、実習：織機の構造と操作方法、オリジナルテキスタイル制作
第2週（2/17月～ 2/21金）：学外研修（文化・ファッションテキスタイル研究所）	研究所の説明と見学、講義：テキスタイルづくりの基礎知識、実習：織物分解、オリジナルテキスタイル試織
第3週（2/25火～ 2/28金）：学外研修（文化・ファッションテキスタイル研究所）	実習：組織作り、糸選定、企画書作成、オリジナルテキスタイル制作
第4週（3/2月～ 3/4水）：事後研修（学内、COVID-19感染拡大防止のため期間短縮）	学外研修のふりかえり、研修活動報告書・プレゼン資料作成、プレゼンテーション、自己評価

成果と課題

織物に使用する素材、糸の太さや色、織組織など、どれかひとつが異なるだけでも、織り上がる布地が全く違うものになることに驚きを感じていた。学内での授業ではなかなか接することがない機械で作業を行い、普段何気なく購入している布地が、職人の知識をもとに様々な試行錯誤を経て商品となっていることに気づき、ファッションにおけるテキスタイルの重要性を改めて学び、今後の学生生活や将来にキャリアにつなげようと考えることができた。（以下、参考）

・数千以上のテキスタイルハンガーを閲覧して、組織や糸の色、使用する織機をひとつでも変えれば無限にテキスタイルが生み出せることがわかり可能性を感じると共に、職人さんが色の配列で試行錯誤しているのを見て、更に良いものを作ろうとするこだわりを持つことが大切であると感じました。

・職人さんは組織図を見ただけで大体の完成像をイメージできていたので、それほど組織図が重要な役割を担っているのだと学ぶことができました。

総括と今後の展望

・**「プログラムのデザインでおこなった工夫」** 今年度初開講であったので、プログラムの内容について、他のプログラムとの差別化を図りながら、研修先と検討を重ねた。モノづくりが好きな学生が多いため、なるべく手を動かす実習の時間を多くとるように心がけた。

・**「長期学外学修プログラムの教育効果」** 製造の現場で培われてきた技術や伝統を「身に付ける」まではいかないとしても「より近く感じる」「自分の将来と重ねる」ことができるようになるのは、やはり短期では単なる見学になってしまい難しいと思われる。研修を通して、テキスタイルの製造工程だけでなく、そのような伝統や意識の持ち方、限りある時間の中でのスケジューリングなどを学び、今後の大学生活やキャリアデザインについて考え直す良いきっかけとすることができた。

・**「長期学外学修プログラムを行う上での課題」** 研究所所員の人数が少なく、学生が大型の機械を使って実習しているときは、どうしても付きっきりとなってしまうため、研修先の負担はかなり大きかったと思われる。曜日限定で出勤している所員（職人）もおり、このプログラムのために時間外もボランティア的に指導してくださった。次年度も協力していただけることになっているが、内容を再検討し、研修先に過大な負担とならないようにしていきたい。しかし、学生はもっと研修先での実習をしたかったと言っていたので、兼ね合いが難しい。

所属学部学科 | 服装学部　ファッションクリエイション学科

▶履修の目的･目標

昨年のAPでニットについて学んだときに、織物のテキスタイルハンガーを見る機会があり今までに見たことない興味を引くものばかりで、この素材で服を作りたいと思いました。授業の服作りの生地選定ではいつもこのデザインにはどういう生地が合うかを生地屋にある中から選んでいるけど、妥協してしまうところもあったり作っても理想通りに出来上がらないこともあり、もっとテキスタイルへの知識を持ち自分の服作りの幅を広げたいと思い参加しました。今後、テキスタイルを生かしたデザインの服や、素材からこだわったものが作れるようにもっと学びたいと思います。

▶研修で最も印象にのこったことについて

初め二重織のテキスタイルを見たとき２枚の布を緯糸を挟んで縫っているのかと思ったが、織の組織図で出来上がることを知り最も印象に残りました。ニットでホールガーメントという無縫製の方法で無駄なく服が作れると勉強し布帛でも同じことが出来ると勉強になりました。

そして、多重織のしくみについて授業を受けて実際にジョインチェックを切ってマフラーを作りました。二重織は一見複雑そうに見えるけど、平織りなど単純な組織を上手く重ねて作り出しているだけで、仕組みがわかると３重４重以上も自分で簡単に作れることが分かりました。二重織という組織だけでも、二重織にして浮き糸を出してストールにすると繊細なものができたり、太い糸で織りカットして他にはないデザインにしたりと、織物には無限といっていいほど多くの選択肢があることがわかり、もっと深く学びたいと興味が沸きました。

▶研修を通して気づいた事・学んだこと

数千以上のテキスタイルハンガーを閲覧して、組織や糸の色、使用する織機をひとつでも変えれば無限にテキスタイルが生み出せることがわかり、可能性を感じると共に選択肢が沢山あればあるほど、ひとつの違いだけでも更に良いものを作ろうとする気持ちがあり大変だということを実際に職人さんが色の配列で試行錯誤しているのを見て感じました。シャトル織機は、専用の糸巻き機で使用する糸をボールペンくらいの大きさの木の棒に巻いてシャトルの中に入れる作業があり、一度に巻ける糸の量は決まっている為何度もシャトルを交換しなければいけません。また繊細な機械なのですぐ動きが止まるし、どこを直すか長年の技と感覚がないと使いこなすのは難しいとおっしゃっていて、機械で動かしてはいるものの、結局手作業も多く人の手が必要な機械だと感じました。

▶今後の学生生活に生かしたいこと

織物と編物の基礎について学ぶことができ、服の製作では素材からこだわり、デザインから素材を探すだけでなく、テキスタイルから考える服を作れるようになりたいと思いました。なので進路やりたいことが明確に決まっていなかったですが、APを受けてみてテキスタイルが学べる授業を受けてみようと考えました。服の基礎であるテキスタイルを学び、そこからよりファッションへの理解を深められるようにこのAPでの経験を生かし３年生の進路の選択をしていきたいです。そして、自分はファッションへの知識や理解が全然足りないことがよく分かったので、ちゃんと勉強して自分で選択肢を広げられるよう今後頑張っていこうと思います。

ありがとうございました。

〈梅春〉ハワイ研修

授業概要（語学研修、現地文化研修、現地企業訪問）

・UHWOが主催する4週間のプログラムに参加。隣接するハワイ東海大学学生寮に滞在し、語学研修、現地文化体験理解プログラム、現地企業訪問し海外で働くことのイメージ作りおよび日常生活を通じて海外での生活を実際に体験する。
・UHWOの学生達との交流を通して語学力や異文化理解を深める。

到達目標

・英語力の強化、グローバルな創造力を修得し、国際的な視野を醸成する。

期間／スケジュール

第1週～第4週の 4週間プログラム	・UHWO校において、現地教員により運営されるプログラムに参加、受講。 午前　英語集中講座　/　午後　ハワイ文化理解講座 ・現地企業訪問 毎週1社をUHWO職員が引率し現地企業(ホテル業中心)を訪問。将来の海外インターン、海外での就職のイメージ作りを実施。(本年より実施)

成果と課題

・英語力の向上、文化習慣の違いを肌で感じ取り、将来の選択肢の幅を広げるために必要不可欠な目的意識を持って研修に参加し、積極的に取り組んでいた。
・慣れない集団生活の中で、精神面の不安や個々の考えの違いからメンバー間の不況和音も出たようだが、高年次学生によるヒアリング、調整をきちんと行ったおかげで全員のチームワークが向上した。
・現地学生によるサポート、彼らとの交流により、教室外での英語の習得効果が上がったこと、現地文化の理解が深まった。教室での講義に加えて、現地学生との交流により、習ったことの実践を時間を置かずに行えた環境は有効。

総括と今後の展望

・本年より現地企業訪問を実施依頼。ハワイならではの最上級リゾートホテルイトへの訪問が実現し、実際の業務内容の確認、料理の試食の機会を得た。ホテル業界を目指す学生だけではなく、一流のホスピタリティに触れたことは貴重な体験だった。
・現地担当者と7月に面会し、本学のハワイ研修に対する考え方を説明し、共通認識を持った。現地の生活環境、リスクの有無などが確認できたこと、企業訪問の意向を伝え実施につながったことなどを含めて、現地に出向き現地担当者と意見交換をすることは不可欠である。

所属学部学科 | 現代文化学部 国際文化・観光学科

▶履修の目的･目標

長期滞在をあまり経験したことがないという点が参加を決めた理由です。

そして本格的な語学留学（研修）も経験がないため、自分のスペックに大きく影響すると感じています。東京オリンピック・ボランティアでの活用、テーマパークでのアルバイトにも経験が大いに生かせると感じています。この経験を通して、語学力・コミュニケーション力・リーダー力を得ることが出来れば将来の自分に繋がると感じていました。

▶研修で最も印象にのこったことについて

印象深いものは 毎週末の各イベント です。自分からアプローチしたり、表現して行く大切さを三週のプログラムを通して学べたと実感しています。

（一週目）ファーマーズマーケット/ダイヤモンドヘッド・ハイク　（二週目）ビーチ・デイ　（三週目）アラモアナ・スカベンジャー・ハント　が組まれており、どちらもUHの学生が筆頭となりあまり経験したことのないことに挑戦したり、あまり知られていないロケーションへの訪問など今後の観光分野を学んでいく私としてはとても良い経験であったと感じました。

チームワーク力やミニトークの切り出し方なども学ぶことができました。自分自身が積極性や相手の行動や物事への興味性を持つことがUHの学生らとコミュニケーションを取る上で重要なんだと感じました。観光で訪れて見つけられるもの、留学として見つけられるものは大きく違うと実感できました。

▶研修を通して気づいた事・学んだこと

大きく気付かされたのは、クラスでの「会話のスピード力」と「文法での表現力」です。日常会話や接客会話を中心に日頃から会話していましたが、この留学研修で自分の盲点だと気づくことができました。対 訪日外国人とは、当たり前に違い、ネイティブとの言葉のキャッチボールの難しさ、瞬時に文を構成してコミュニケーションを取る難しさ、難しいことだらけでした。

ですが、クラスの先生や現地の学生が協力してくれて、伝わり易い言葉の表現もサポートしてもらえたので、恥ずかしがらずにパッと会話できるように成長を感じられたと感じました。

現地学生らと連絡先も交換し、帰国してからでも積極的に連絡を取ってくれています。おかげさまで、ポテンシャルを保つことができているので現地の学生に感謝しています。

▶今後の学生生活に生かしたいこと

より人のこと（性格や価値観や世界観）を受け入れるように成長できると感じました。今までアジアやアメリカ、ヨーロッパなどを旅行してきましたが、長期滞在をしてみることでより人と関われますし、それにより価値観や世界観を知ることができて分かり合える関係を築けると実感できました。この先、ゼミや就職、東京オリンピック・ボランティアなどでより多くの人たちと関わっていきますし、知らない価値観や世界観を知ることが増えてきますので、研修で学んだ積極性や興味性をより活用していけると感じています。この経験を自分だけでなく、学内・学外問わずに多くの人たちに共有していき、自分のコミュニティーの拡大にも生かしていければ、より多くの人が人を理解し合えるようになるのではないでしょうか。

〈梅春〉シドニー・メルボルン研修

授業概要

オーストラリア・シドニー Whitehouse Institute of Design Sydney校ならびにメルボルンWhitehouse Institute of Design Melbourn校にて、講義聴講と現地学生との交流、学外学修として現地企業インターンシップ及び美術館訪問、世界最大規模のLGBTQIパレード「シドニー・マルディグラ」、オーストラリア最大のファッションウィークに参加する。言語はすべて英語となる。

到達目標

本学の長期学外学修プログラムは、コミュニケーション力、伝統・文化理解力、グローバルキャリアデザイン志向をもった「グローバル創造力」の育成を目的としている。1週間の事前研修、2週間のオーストラリア・シドニー Whitehouse Institute of Design Sydney校、1週間のメルボルンWhitehouse Institute of Design Melbourn校における学外学修、世界最大規模のLGBTQIパレード「シドニー・マルディグラ」、オーストラリア最大のファッションウィーク参加により、異文化の理解深耕を図り、今後ますます進展するグローバル化社会においてファッションを中心とした分野で発揮できる能力を養成する。

期間／スケジュール

	月	火	水	木	金	土	日
第1週	2/11	2/12	2/13	2/14	2/15	2/16	2/17
		事前研修			羽田発 シドニーへ出発	シドニー着	自由行動
第2週	2/18	2/19	2/20	2/21	2/22	2/23	2/24
	Whitehosueにてオリエンテーション	Whitehouseにて研修・学生との交流	シティツアー	Musium of Applied Arts & Sciences見学	Whitehouse講義へ参加	自由行動	自由行動
第3週	2/25	2/26	2/27	2/28	2/29	3/1	3/2
	インターンシップ （Vogue Australia, InStyle Magazine, Marie Claire）				Mardi Gras Parade見学	シドニーからメルボルンへ移動	自由行動
第4週	3/3	3/4	3/5	3/6	3/7	3/8	3/9
	Whitehosueにてオリエンテーション	メルボルン観光（Laneway Walk等）	Whitehouse講義へ参加	ファッションショー見学	自由行動	メルボルン発 成田着	
第5週	3/10	3/11	3/12	3/13	3/14	3/15	3/16
	事後教育	研修報告会					

成果と課題

このプログラムは、オーストラリアを代表するシドニーとメルボルンという歴史的、社会的、経済的特性が異なる都市に滞在し、研修や様々なイベント体験を通じて「グローバル創造力」を身に着けることが企画目標である。提携校であるWhitehouse Institute of Designのシドニー校、メルボルン校が現地ならではの多彩なプログラムを組み立ててくれることも本プログラムの特徴点である。

両校の現地学生との交流や講義の受講、グループに分かれての現地ファッション企業3社へのインターンシップ体験、シドニーでの世界最大級のLGBTイベント「MardiGrasParade」見学、メルボルンで開催されるオーストラリア最大のファッションイベント見学などファッションに特化した多彩なプログラムを実施した。これにより、他科目との重複を避け、履修目的が明確な学生によって開催できたことは成果といえる。

プログラム内容の面では、多様性を受け入れ得る動きの1つといえる「MardiGras Parade」見学で、大きな感動を得て、人間としての個性を主張し、認め合う大切さを学んだ。また、様々な体験を通じて異文化を受け入れる姿勢を実感し、企業インターンでの体験、オーストラリア人のやさしい国民性に感動したと、学生一人ひとりが様々な体験を得て文化的側面におけるグローバル化の影響への気づきを得ることができた。また、研修を終えて自身の将来の目標を見出せた学生もおり、一人ひとりがグローバル創造力を意識し、高められたことが報告書からも読み取れ、成果であったといえる。

今後の課題は、本大学ならではのファッションに特化した特徴的な内容を、提携校と情報交換を深め、磨き上げていくこと。もう1点は、参加した学生たちの高まったモチベーションや気づいた能力を今後の大学生活でどのように生かしていくのか、フィードバックや指導方法など今後の詰めていくべき課題と捉えている。

所属学部学科 | 服装学部　ファッション社会学科

▶履修の目的･目標

私は将来、漠然と海外で活躍したいと思っています。そのためには、海外に行って経験することは必要なことだと思います。行ったことのない国の文化や伝統を知ることはとても刺激になり、文化のプログラムだからこそ体験できることもあると思い今回のプログラムに参加しました。シドニー、メルボルンの流行は何か、日本にはないシドニー、メルボルンならではの文化やファッションを学び、今後に活かしていきたいです。

▶研修で最も印象にのこったことについて

もともと今回の研修でマルディグラのパレードを見られるのがとても楽しみでした。行く前にも動画で何度か見たことがありましたが、生で見るパレードには圧倒されました。土曜日に行われるパレードの前から街がレインボーで溢れていて、当日になると、派手なメイクに派手な衣装を着て、LGBTQの人だけでなく街中の人がキラキラしているマルディグラの空気に感動しました。パレードを盛り上げるため、警察や消防士から企業、学校など様々な団体がパフォーマンスしていて、見ている私たちとハイタッチやハグをし、パフォーマーだけでなく、そこにいる人全員が笑顔で楽しそうで素敵な時間だなと思いました。マルディグラのパレードで最も魅力的なことは、自分たちが好きなように好きな服やメイクができることです。どんなに露出していても、どんなに派手でも、それが個性であり、自分を表現していてかっこいいと思いました。

▶研修を通して気づいた事・学んだこと

今回の研修で学んで、自分の気持ちが動かされたものが2つあります。一つは個性です。文化学園大学に通っていてみんな個性で溢れていて、自分にも個性があり、その個性を服で表しているつもりでした。しかし、シドニーで買い物をしていて、これは日本では露出が多いから着られないと思い、買うのを断念した服が何着かありました。オーストラリアはお腹が出ている服を着ている人や、ノーブラの人がいて、露出に対しての価値観が日本と違うなと思いました。価値観が違うけれど、自分の個性を殺さず、好きな服を着ていることがかっこいいなと思いました。もう一つは英語力です。研修の2日目にシドニーのWhite Houseの学生と話す機会がありました。相手の話すスピードについていけないうえ、自分の知っている単語数が少ないため、まったく会話ができませんでした。しかし、研修20日目に、メルボルン校の学生と交流した際、相手の話も理解し、一対一でも楽しい会話ができました。まだ分からない英単語がいくつかあるけれど、約2週間でこんなにも変われることに驚き、自信になりました。

▶今後の学生生活に生かしたいこと

今回の研修に参加して、やはり英語力がまだまだ足りないなと感じました。単語の意味が分からず会話が止まり、ネイティブな発音ができず伝えたい話が伝わらないことが何度もあり、悔しいと思いました。そのためにまずは、分からない単語はすぐに調べることを徹底し、意味を理解している単語数を増やしていこうと思います。そして発音は、自分が正しい発音をしているか、実践する場がなければ分からないので、アプリを使う、英会話教室に通うなど自分に合った方法で向上させていきたいです。自分のできることを今からやっていき、それらを習慣化して、英語を身につけていきたいです。

そして今回の研修で、インターンシップやマルディグラなど、たくさんの貴重な経験をしました。オースト

ラリアはファッションのイメージが全くありませんでしたが、実際はとても刺激的なデザイナーが多くいて、レインボーが溢れていて、移民の多い国だからこその文化を感じました。オーストラリアで吸収した知識、経験は私のファッションへの価値観に大きく影響しました。この経験を今後、自分の武器にできるようにしたいです。

〈梅春〉ブリスベン研修

授業概要

文部科学省大学教育再生加速プログラム（AP事業）である長期学外学修プログラムとして実施する。後期試験終了後から春期休暇までの4週間にわたり海外学修を体験する。TAFE QUEENSLAND BRISBANEにて、英語研修、ワークショップ、講義、異文化交流、課外授業などに取り組む。また、自然豊かなゴールドコーストにおいて、現地の文化に触れグローバルな視点を養う。言語は、すべて英語となる。

到達目標

本学の長期学外学修プログラムはコミュニケーション力、伝統・文化理解力、グローバルキャリアデザイン志向をもった「グローバル創造力」の育成を目的としている。

1週間の事前研修に加え、2週間にわたるTAFE QUEENSLAND BRISBANEでの英語研修、ゴールドコーストでの1週間の文化体験により、英語によるコミュニケーション力の向上、異文化の理解深耕などを図り、今後ますます進展するグローバル化社会において、ファッションを中心とした分野で発揮できる能力を養成する。

期間／スケジュール

AP 梅春学期　ブリスベン/ゴールドコースト研修 2019

■　研修日程：　令和2年2月12日（水）～3月8日（日）　■

	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat	Sun
	2/10	2/11	2/12	2/13	2/14	2/15	2/16
Week 1		祝日	10:40- AP事前教育			17:30までに チェックイン 19:30 成田発 QF 62便	5:40 ブリスベン着 専用車にて 空港→寮 Atiraへ (*日本旅行ドライバー迎え)
研修先							
	2/17	2/18	2/19	2/20	2/21	2/22	2/23
Week 2	8:10までにF Block Level 6 集合 *パスポート持参 12:30-Welcome BBQ	8:15-12:30 英語研修 General English course (ELICOS) TAFE Queensland Brisbane at South Bank				自由行動	自由行動
研修先	オーストラリア　ブリスベン (SouthBankキャンパス)						
	2/24	2/25	2/26	2/27	2/28	2/29	3/1
Week 3	8:15-12:30 英語研修 General English course (ELICOS) TAFE Queensland Brisbane at South Bank					ゴールド コーストへ 全員電車にて 移動 15:00-ホテル チェックイン	Horbour Town Outlet Shopping Center等へ 各自
研修先	オーストラリア　ブリスベン　(SouthBankキャンパス)					ゴールドコースト	

	3/2	3/3	3/4	3/5	3/6	3/7	3/8
Week 4	9:00 ホテル迎え（日本旅行日本語ドライバー）UGG Factory Tour 専用車にて→ブリスベンへ	9:00-12:00 授業見学 observe a fashion class at Mt. Gravatt	博物館訪問 各自で Queensland Museum & Science center	9:00-12:00 授業見学 observe a fashion class at Mt. Gravatt	授業見学+送別ランチ observe a fashion class +Graduation lunch	自由行動	6:45 am 送迎車到着 寮→空港へ 9:25 ブリスベン発 17:30 成田帰国 QF61便
研修先	オーストラリア　ブリスベン（Mt. Gravattキャンパス）						
	3/9	3/10	3/11	3/12	3/13	3/14	3/15
Week 5	10:40- 事後教育	10:40- 事後教育 13:00-発表					
研修先							

成果と課題

昨年度よりブリスベン研修を語学研修に特化したプログラムに改め、同じくオーストラリアで実施した「シドニー・メルボルン研修」との差異化を図った。その結果、本年度も英語力の向上を目的とした学生が履修し、参加目的と実習内容のミスマッチを避けることが出来た。

オーストラリアの語学学校では日本以外の地域から来た学生も多かったことにより、出身地域によって話される英語も異なるという気づきを学生が得ることが出来た。英語にも文化的な多様性が反映されることを体験できたという点で、単なる語学研修にとどまらない成果を挙げられたと考えられる。

また、本年度は「シドニー・メルボルン研修」および「シンガポール・インドネシア研修」と合同で、事後教育の報告会を実施した。これによって、ほかの地域で研修に参加した学生の経験を比較し、自らの経験を学生自身が相対化することが可能となった。

所属学部学科 | 現代文化学部　国際ファッション文化学科

▶履修の目的･目標

今回このプログラムを希望したのは、もともとオーストラリアのブリスベンという街に興味があったからです。この約3週間で、日本と全く違った環境で生活してたくさんの刺激を受けることが目標でした。環境が違うだけじゃなくて言葉も違うので、短い時間のなかで沢山のコミュニケーションを取って語学力を少しでも身につけて帰ることを目的としていました。

▶研修で最も印象にのこったことについて

フレンドリーで優しい人が多い印象を受けました。スーパーやコンビニ、バスなどの公共交通機関の人たちにも挨拶をするのが当たり前だし、感謝の気持ちを伝えるのが当たり前なのが驚きました。東京と違って静かで落ち着いた街だったからかもしれないですが、小さいことでも感謝を伝えたり挨拶をすることが当たり前なことが凄く素敵だと思いました。日本の特に東京は忙しくて落ち着いてないので、そういった当たり前のことを忘れがちですが、これを機に小さいことでも自分から感謝を伝えようと思いました。同時に海外に人たちと比べると、日本人は静かで恥ずかしがりやだと思われているだろうなと思いました。授業中も発言をするのが当たり前だし、分からなかったら質問をするのが当たり前なので授業中に静かになることが少なくて新鮮でした。友達同士で話し合いながらそこに先生も加わって来たりして、授業はいつも楽しい時間でした。日本だと誰かが言わないと言わなかったりすることが多いので、そこが全く違うくて驚きました。

▶研修を通して気づいた事・学んだこと

語学学校では様々な国の人たちと出会うことが出来、それが一番貴重な体験になったと思います。私のクラスにはコロンビア人、韓国人、ブラジル人、中国人、ベトナム人が居ました。みんなは1月にオーストラリアへ来て学校へ通い始めて約2か月経っている状態でした。なのでそれぞれ仲の良い人が居たりしていましたが、授業でのグループワークやペアワークをする中ですぐに仲良くしてくれたり、毎朝挨拶をしてくれるようになって気さくで優しい人たちに囲まれていました。これがもしも日本の学校だと考えると、なかなかこうはいかないんじゃないかと思いました。毎日オーストラリアで過ごす中で、驚きや発見を見つけたときにすぐ日本と比べていましたが、やはり日本人はシャイだったり、他人に心を開きにくいことが多いと思いました。私自身人見知りが無く、うまく伝えたいことを伝えられなくてもあまりこだわらず積極的に話しかけていたので授業だけではなく友達との会話からも語学力を身に着けることもできました。お互いの国の話をすることが多かったですが、海外の人たちから見る日本人は、凄くきちんとしていて挨拶ひとつで気持ちが引き締まると言っている人が居ました。自分たちはそういった真面目で洗礼された日本文化の中で育っているからこそ、海外のラフで陽気な雰囲気に惹かれるんだなと感じました。こうやって母国と違った他国のあたりまえを沢山見たり聞いたりする事が、自分の視野を広げることに繋がるんだと感じました。ファッションクラスに関しては、私が見た授業ではスカートのベルトの作図をしていました。私はスカートを2着制作していたのですが、ベルトの作図は一度説明を聞いてすぐに自分で取り掛かるような感じでした。でもテーフの学生たちは30分ほどかけて細かいところまで理解しながら制作していました。私たちの造形に関しては短時間で新しいことを勉強して、ひたすら実践することで理解しているので、そこが文化の授業とは全く違いました。

▶今後の学生生活に生かしたいこと

今回は23日間という短い期間の留学でしたが、とてもいい刺激を沢山受けることが出来ました。なので今よりもっと語学力が付けばもっと多くの経験をすることが出来るんだろうと思います。正直、語学学校での授業内容は中学生で習ったことの復讐のような内容でした。ですが、他のクラスメイトは問題を解くことに苦戦していてもスピーキングはすごく出来ている印象でした。少し会話のコツがわかってこれからどんどん話す練習をしたいと思ったのが丁度最後の2週間経とうとしている頃でした。同時に少し話すことが怖くなくなってきて分かったのは、発音の大切さでした。語学学校内だと多少下手な発音でも先生達は聞きとってくれますが、お店などの外で現地の人と話すとなると発音が悪くて伝えられないことがありました。海外留学は今回が初めてだったので、英語でコミュニケーションを取る上で発音がとても大切だということがよく分かりました。次海外留学へ行くのはいつになるか分からないですが、この感覚を忘れないようにすることを意識して生活したいです。例えば、街で困っている外国人が居たら声をかけたり、海外の映画を観る時に字幕や音声機能を工夫して観るようにしたりして日本にいながらできることをしていきたいです。

〈梅春〉ニューヨーク研修

（語学研修、企業研修、NY コレクション見学）

授業概要

ニューヨークでの4週間のプログラムでは、語学学校での学びやFIT（ニューヨーク州立ファッション工科大学）の学生達との交流を通して語学力や異文化理解を深める。また、ファッションショー見学やアパレル企業研修、市場調査、美術館見学では、ニューヨークの最新トレンドやビジネスの仕組みとVMD、芸術などに関心を持つことを目的とする。

到達目標

語学力の強化や、グローバルな創造力を修得し、物事を国際的な視野で考えることができる。

期間／スケジュール

第1週	語学研修、メトロポリタン美術館見学（ツアー）、アパレル企業訪問、アパレル企業研修（インターンシップ）、FIT見学、FIT学生と交流、ニューヨークコレクション見学
第2週	語学研修、アパレル企業研修（インターンシップ）、自由行動
第3週	語学研修、アパレル企業研修（インターンシップ）、FIT学生と交流、自由行動
第4週	語学研修、アパレル企業研修（インターンシップ）、MoMA見学、自由行動、帰国

成果と課題

英語力の向上や経験値を高めるため、将来の選択肢の幅を広げるためなど、学生はそれぞれ目的意識を持って研修に参加し、積極的に取り組んでいた。ニューヨークでの4週間の研修プログラムは、慣れない環境での生活が伴うため、体調面や精神面を整えることも重要であり、自立性も養われる。週4日、計16回の語学学校での英語のクラスは、レベル別の少人数制であり、自分に合ったより効果的な学習法を修得した者も多い。学生は、研修先や日常生活で、様々な国の人と接することで英会話能力も高まり、芸術に触れる機会も多く異文化理解も深まったと実感している。引率教員と行動する第1週は、研修先を多く設定しているためタイトなスケジュールとなり学生への負担もあった。今後の見直しは必要である。

総括と今後の展望

・**「プログラムのデザインでおこなった工夫」** 企業研修（インターンシップ）を3社で実施したところ、一部の学生から仕事内容に対して不満が出てしまったが、メールや電話などで対応し、学生同士で意見交換するなどして解決した。

・**「プログラムの運営においておこなった工夫」** 担当教員による引率期間は学生の対応が直接可能であるが、第2週以降は学生だけでの研修となるため、緊急事態が発生した場合のリスクマネジメント対応を現地在住者に業務委託する必要がある。リスクマネジメントについては外部機関への委託等、今後の課題である。

・**「長期学外学修プログラムの教育効果」** 英語に対する自信がつき、海外での生活力や国際的な人間性を身につけることができる。また、プログラムを体験して学生は明らかに主体性、自律性などが身につけられたことも効果として大きい。

・**「長期学外学修プログラムの今後」** 海外での就職や英語力の向上を目指す学生が有意義に研修できるような充実したプログラムにしていきたい。企業研修（インターンシップ）は必要な学生には継続するなど、対応を考えていきたい。

所属学部学科 | 服装学部　ファッション社会学科

▶履修の目的･目標

このプログラムを履修した理由は、英語を使い、インターンシップで今まで学んだファッションに関する知識を生かしたいからだ。「今まで学校で学んだ知識を身につけましたか。」「今まで学んだ知識は将来社会に出る時に活用できますか。」「英語はどの部分がまだ足りないですか。」って言う沢山の疑問を持ち、このプログラムを履修した。

▶研修で最も印象にのこったことについて

研修で最も印象に残ったころは、やはりAnna Suiのファッションショーだ。世界4大ファッションショーの中で最初に開催されたニューヨークコレクションに参加できることは、私の夢だ。会場のインテリアから、ステージの広さまで何もかも良かった。バックステージも行かせてくれ、実際にどのようなことがあるかって目に見た。モデルさんやスタッフさん、みんなファッションショーのために一生懸命頑張って、忙しい姿と真剣な表情が今でも印象に残った。会場の椅子にAnna Suiのグッズがあったり、夢幻な音楽が流れたり、目の前にAnna Sui本人が何方と話したり、遠くの写真ブースにフラッシュが止まらなかったりしていた。私は、今ここにいることが一生でも忘れないで本当に夢のようだって頭の中に浮かべた。

▶研修を通して気づいた事・学んだこと

研修を通して気づいた事・学んだことはいくつかあり、その中で最も深く感じたのは伝統や異文化の理解だ。アメリカの伝統や文化だけではなく、NYEA語学学校で様々な国の文化や習慣を理解できた。他人の習慣や宗教に対しての私たちの尊重の気持ちを表すこと、自分とは異なる価値観や考え方の持ち主に対して適当に批判的な態度をとらないこと、「この人は○○人だから」と偏見を持たないことなど・・・　文化には違いはあるが、優劣はない。文化の多様性を認める姿勢を持てると良いと思う。また、コミュニケーション力もどの国に行っても必要なものだと思った。日本語で会話することと英語で会話することは全く違うので、それぞれの文化の理解の上に、コミュニケーションを取る。

▶今後の学生生活に生かしたいこと

今回のAPプログラムを通じて、やはり自分の語学力がまだまだ足りないと思った。英語だけではなく、日本語ももっと勉強しなければならない。語彙を豊富にさせるために、これからの学生生活に、語学力を高めたいと思う。去年7月にTOEIC IPテストで取った点数は低い方ではないけど、高くもない。日本語能力試験N2しか持っていないので、今回N1を取りたい。TOEICと日本語能力試験のために、毎日5個ずつ新しい単語を覚えるように頑張りたいと考える。インターンシップでは、ブランド力を高めるためにリサーチされたが、うまくいかなくて焦ってしまった。ファッションに関する専門知識や経験は全く足りないので、これからも学び続けなければいけないと、より深く感じた。

〈梅春〉シンガポール・インドネシア研修

授業概要

後期試験終了から春期休暇までの4週間にわたり海外学修を体験する。シンガポール Lasalle College of The Arts校にて、学外学修、途中1週間、インドネシア・バリ島に移動し、インディゴ染め、セラミック製造、バティック、鋳造などのサステナビリティ技法を実習を通じて学ぶ。

到達目標

本学の長期学外学修プログラムは、コミュニケーション力、伝統・文化理解力、グローバルキャリアデザイン志向をもった「グローバル創造力」の育成を目的としている。1週間の事前研修、2週間のシンガポール Lasalle College of The Arts校、1週間のバリ島における学外学修、特に島全体がサステナブル（持続可能性）を島全体で実現している諸活動を学ぶとともに、イスラム教の文化に触れ、宗教が生活に占める重みを体感する。それらの活動により、異文化の理解深耕を図り、今後ますます進展するグローバル化社会においてファッションを中心とした分野で発揮できる能力を養成する。

期間／スケジュール

	月	火	水	木	金	土	日
第1週	2/4	2/5	2/6	2/7	2/8	2/9	2/10
	事前研修					成田発 シンガポール 着	自由行動
第2週	2/11	2/12	2/13	2/14	2/15	2/16	2/17
	Lasalle College of The Artsオリエンテーション	Lasalle College of The Artsにて学生の作品作業に参加	Lasalle College of The Artsにてテキスタイル論聴講	Lasalle College of The Artsにてパターン演習聴講	ナショナルギャラリー・シンガポールほか見学	自由行動	自由行動
第3週	2/18	2/19	2/20	2/21	2/22	2/23	2/24
	シンガポール国立博物館ほか見学	Lasalle College of The Artsにて学生の作品作業に参加	Lasalle College of The Artsにてテキスタイル論聴講	Lasalle College of The Artsにてパターン演習聴講	ザインタン（プラナカン文化）ほか見学	自由行動	自由行動
第4週	2/25	2/26	2/27	2/28	2/29	3/1	3/2
	アジア文明博物館ほか見学	Lasalle College of The Artsにて学生の作品作業に参加	Lasalle College of The Artsにてテキスタイル論聴講	シンガポール発	成田着		
第5週	3/10	3/11	3/12	3/13	3/14	3/15	3/16
	事後教育	研修報告会					

成果と課題

今年度、東南アジアにおける異文化を体験するプログラムを企画した。語学研修プログラムは実施せず、シンガポールでは、東南アジアにおけるファッションの捉え方やビジネスの実態、そのほか植民地としての風習・文化、生活に占める優先順位の高い宗教など日本とは異なった歴史・環境において異文化を学ぶプログラムとして実施した。これにより他科目との重複を避け、履修目的が明確な学生によって開講できたことは成果といえる。プログラム内容の面では、残念ながら新型コロナ禍による影響により、バリ島への渡航は中止とした。しかし、シンガポールにおいて3週間研修期間がとれ、Lasalle College of The Artsにて講義聴講と現地学生との交流、学外学修として現地美術館及び博物館の見学など異文化を受け入れる姿勢を体験し、学生が文化的側面におけるグローバル化の影響への気づきを得ることができた。

所属学部学科 | 現代文化学部　国際ファッション文化学科

▶履修の目的･目標

英語を使って海外でファッションを学びたかったので、梅春の研修を希望しました。バリ・シンガポール研修を選んだ理由は、二つあります。まず一つ目は日本語が通じない外国に行くことで自分の語学力を把握し、伸ばしたいと思ったからです。二つ目はファッションのサステナビリティに興味があり。現地で体験しながら学びたかったからです。また、今回初めてのプログラムということもあり、参加者が少数だったのも、より深く学べる機会を得られると思って、この研修に参加しました。研修を通して、たくさんの人と積極的に関わり、コミュニケーションをとりたいです。

▶研修で最も印象にのこったことについて

シンガポールの国際的なところがとても印象に残りました。シンガポールは小さな国ですが様々な国の人が滞在しています。特に中国人やインドネシア人が多いと感じました。映画には中国語字幕がついていたり、現地でできた友達が中国語やインドネシア語などの母国語と英語をきれいに使いわけていたりと、その国際豊かな一面に驚きました。そして、学校の人は日本人の私にとても優しくしてくれて、シンガポールやそれぞれの出身国についてたくさんのことを教えてくれました。シンガポールは、色々な文化の人たちが混ざって共存している場所で日本との違いを感じました。また、研修中に通ったLASALＬＥの生徒の積極性も印象に残りました。グループディスカッションでは積極的に発言したり、休日や放課後の夜遅くまでプレゼンの準備や作品作りをしていました。友達の作品や作業工程を見せてもらい、自分が表現したいことが明確にあり、それに向かって模索しながら課題に取り組む姿勢が印象に残りました。

▶研修を通して気づいた事・学んだこと

今回の研修で学んだことはたくさんあります。まずは多くの人とコミュニケーションをとるにあたって、やはり公用語である英語を学ぶことが大切だということです。英語を使うことで、英語が母国語でない人同士でも話すことができるようになり、出会いの可能性がとても広がることに気がつきました。各国のなまりがあって聞き取りづらい部分も多くありましたが、文法が合っていなくてもとにかく話して、意思疎通することが大切なことだと学びました。最初はシンガポールの独特な英語に全く慣れなくて、大変でしたが、段々とリスニングが出来るようになりました。研修が終わるころには友達から英語について褒められたので嬉しかったです。しかし、自分の英語力はまだまだ足りておらず、意見を述べるようなより深い会話をするには知識やコミュニケーション力が必要なのだと痛感しました。特に自分の出身国である日本について知らないことが多く苦労しました。また、ＬＡＳＡＬＬＥでの友達の作品や作業行程を見せてもらったことで積極的に取り組むことの大切さを知りました。LASALLEの人たちはテーマに沿った作品を作るためにテキスタイルからパターンなど様々な表現方法を試しながら作品を作っていました。彼らのファッションに対して真剣に向き合い、自分を表現していた姿をみて、私も見習うべきだと強く感じました。インターンシップや卒業後のこともしっかりと考えていて、そういった意識を持つことは大事だと改めて気が付きました。

▶今後の学生生活に生かしたいこと

今後も英語を継続して勉強してもっとスムーズな会話を出来るようになりたいです。今回の研修で出会った人はみんな私に優しくしてくれて、毎日がとても楽しかったです。休日にシンガポールの色々なところに連れて行ってくれたり、お昼を一緒に食べてくれたり、学校で丁寧に教えてくれたりと、友達のおかげで充実した日々を送ることが出来ました。しかし、コミュニケーションをとるときに言いたいことをうまく言えなかったり、聞き取れないことや、そもそも話題に対する知識が足りないと感じる場面が多くあったので、そこを改善してもっと会話を楽しみたいと感じました。今回、コロナウイルスの影響でバリに行くことができなかったのでサスティナビリティについてはあまり学ぶことができなかったことはとても残念でした。インターネットで調べるだけでなく、実際にバリに行く機会があったら行き、学びたいと思いました。今回のシンガポールでの研修を通して、一人での初めての海外生活は大変でしたが、自分で行動、解決方法を模索する力を養えることが出来たと思います。そして、ＬＡＳＡＬＬＥで学んだ積極的に課題に取り組む姿勢や、作品に刺激を受けました。それらを忘れずに今後は知識や自分の興味の幅を広げて、日々の学生生活を積極的に過ごしたいです。

グローバルファッションマネジメント実習

授業概要

本授業では、実際に企業で働くことならびに語学研修を通じて、グローバルファッションマネジメントを体験する。国内のグローバルビジネス企業もしくは海外提携先大学（香港，オーストラリアほか）の紹介企業等で、8週間にわたり研修を行う。

到達目標

グローバルファッションマネジメントのために必要なマインド、知識、スキルを実際の企業研修から体得し、広い視野で物事を捉えるグローバルマインドを身につける。これからの大学生活においてどのような学習や研究をしていくのか、また自分たちのキャリアデザインのための基礎的プロセスとして認識できるようになることを目標とする。

期間／スケジュール

本年度の基本スケジュールは令和元年10月～12月のうち8週間となっていた。ミラノで実習を行った学生は8月25日から11月11日まで、東京で実施した学生は10月21日から12月13日までと、学生の希望や受入先企業の状況に併せて柔軟に実施した。

成果と課題

本年度はグローバルファッションマネジメントコースの3名がグローバルファッションマネジメント実習に参加した。昨年度に引き続き、学生によるインターンシップ先の自己開拓が1件あった。自己開拓のほかにも、卒業後のキャリアデザインを念頭に置き、留学生があえて東京の企業でのインターンを選択するケースが今年度も見られた。このような自発的かつ主体的に臨む姿勢が学生の間に浸透しつつあることは、プログラムの継続的実施の成果といえる。

一方で、目的をはっきりと意識できないままに実習を行ったために、インターン先での経験を俯瞰的に捉えて卒業とのキャリアと十分に関連付けられなかった学生もいた。実習の成果を最大化するためにも、事前準備の段階で、卒業後のキャリアデザインを意識させるなど、実習に対する目的意識の明確化をはかる必要があると考えられる。

総括と今後の展望

本科目はこれまで、服装学部ファッション社会学科グローバルファッションマネジメントコースの学生を対象とする必修科目の一つとして開講してきた。そのため、本科目にかける意気込みや目的意識は学生によって異なり、実際に就職活動や卒業後のキャリアにつながる経験にすることができた学生がいた一方で、インターンの目的を見失い結果的に受入れ先企業に迷惑をかけてしまったケースもあった。

実習を有意義なものとして終えることができた学生に共通しているのは、インターンの目的を明確に持っていたことである。この傾向はインターン先を自己開拓した学生で特に顕著であった。インターンの実施のみならず、インターン先の選定、アポイントメント、面談等、インターンの実施に至るプロセスにおいて、目的意識がより明確になるというケースが多かった。このように、本科目においては、実習に至るプロセスが重要であるということが明らかになった。今後は、自己開拓の奨励や前期期間の事前研修のさらなる工夫が必要と考えられる。

カリキュラム変更に伴い、来年度から本科目はファッション社会学科のすべての学生が履修可能な選択科目として開講される。今後は明確な目的意識を持ったより多くの学生が履修することが期待される

所属学部学科 | 服装学部ファッション社会学科　グローバルファッションマネジメントコース

▶ 実習企業名・部署と実習期間

TuttiFrutti International fashion concept
令和2年8月25日～ 11月11日（11週間）

▶ インターン（研修）の目的・目標

バイヤーになりたいという希望で、実際にバイヤーがやっている仕事を見学した。そして自分の世界を広げたい、成長したいという目標でもあり、海外インターンを選らんた。イタリアを選んだ理由は世界に注目があるファッションの街であり、イタリアのインテリアもすごく好きで、イタリアの生活をしてみたかった。

▶ 業務内容

平日の10時から6時までです、しかし忙しい時時間は9時スタートで7時まで終わることもあります。オフィスでパソコンワークが多かったです、必要なスキルはExcel, Photoshop, PPT. 全て英語で使えます。新しい学んだソフトウエアはsalesforceです、会社はこれを使ってバイヤーのインフォを入れ、商品の売り上げも全て入っています。ネットがあればパソコンのウエブで使えます。すごく便利で使え方わかれば仕事は役立ちます。ファッションウィークの時ファッションショーの現場で手伝ったり、お客さんを案内したりもあります。そしてセールキャンペーンが始まった時ブランドのショールームで働きます、この時一番バイヤーさんとのやりとりでした。バイヤーに商品の説明し、サンプルを見せ、Excelで記入、オーダーをします。

▶ 学んだこと

最初の2週間はイタリア教室通っててイタリア語を学んでた、ローカルの人とコミュニケーションできるようになりました。ここで新しい言語を使え、最初はコミュニケーションを取ることすごく難しいでした、しかし向こうの人が理解できる時、そのワクワク感、もっと頑張ってイタリア語を学びたくなります。毎日少しでも成長はできることは分かりました。将来の仕事、とにかくやってみないと分からないので、でも今回のインターンで自分が新しいことを挑戦するのが好きです、毎日同じ生活より、刺激があるな仕事が向いていると思います。しかしバイヤーという仕事は向いていないことが分かりました。インターン中の時もっとクリエイティブなことを望みました。インターンのおかげて自分がもっともやりたいのはクリエイティブの方でした。

▶ 反省点・課題

インターンする時パソコンワークには正直に成長した点はあまりなかったです。上司からの指示で数字をExcelに記入すること。もっとグループワークが欲しかったです、仕事でもっとコミュニケーションを取りたかったです。しかし仕事でできなかったこと、イタリアでの生活はいっぱい出来ました、イタリアで週末の旅行でいろんな人とコミュニケーションを取り、積極的に人と話せば色んなことみにつけました。日本へ戻った時、自分がやりたいバイヤーの目標がなくなり、新しい目標を探しました。コミュニケーションとクリエイティブ両方も役立つ仕事はVMDです。今VMDが必要なスキルを勉強したり、VMDと関係あるインターン、アルバイトを頑張って探してます。イタリアでのインターンで考え方も変わりました。

▶ 後輩に伝えたいこと

目標があればなんでもできること。失敗したことも成長の一つです。そして海外インターンは本当に世界が広がります。文化、ライフスタイル、インテリア、食事、こんなに自分の世界と違くて、ワクワクです、一生も忘れない体験です。

▶ かかった経費

私は学校からのインターンではなく、自分で探しました。Global Experiences というプログラムに申し込みました。元々アメリアのプログラムなので、全部英語です。87万（インターン費、アパート費、イタリア教室費）3ヶ月間。飛行機代は別、食事も別です。海外スーパーで自炊することで節約ができます。一番お金使ったのは毎週の旅行代です。

所属学部学科 | 服装学部ファッション社会学科　グローバルファッションマネジメントコース

▶ 実習企業名・部署と実習期間

ブランドニュース株式会社（東京）　　令和2年10月21日～ 12月13日（8週間）

▶ インターン（研修）の目的・目標

・今まで学校で学んだ知識を活用すること
・日本における職場の文化や礼儀などを学ぶこと
・自分が持っている力や長所を活かすこと
・日本のファッション、化粧品業界の仕事を現場で経験すること

▶ 業務内容

・ショールームにあるアパレルのサンプルの商品をの整理すること
・アパレルのF/Wサンプルの商品の数を確認し、タグを付くこと
・2020S/Sのアパレルの商品に入れ替える作業
・NARS 2020S/Sの商品をプレゼントして美容関係者に送ること
・NARSとBATE MINERALSの化粧品のテスターを整理する事
・出版社からの貸し出しの依頼によって、商品とテスターを送ることと返却して来た商品を整理すること
・NARSの化粧品に関したSNSやWEB記事などをまとめて、EXCELWを作る作業
・アパレルのSAMPLE SALEとNARSのOPEN HOUSEに向けて準備する

▶ 学んだこと

学生にとって、インターンシップを通じて更に多くの機会で様々な仕事を行い、異なる社会的役割を演じ、段階的に職業化役の転化を実現し、自分の本当の潜在力と興味を見つけ、良い事業基礎を打ち立てるだけでなく、自己成長のためにも経験を豊かにします。また、学生として、勉強の目的はテストに合格することより、知識、仕事のスキルを入に入れるためです、つまり、学校で勉強するのは社会のニーズに応じ、勉強を通じて今後の仕事を完成し、社会のために貢献できるということです。しかし、学校から社会に入るには大きな格差があり、緩衝として会社のインターンシップになれば、私にとってはいい機会です。インターンシップをすることによって、仕事の実際なニーズを了解し、今後の目標は更に明らかにした、得られた効果もそれに応じてより良いと思います。

▶ 反省点・課題

どんな仕事でも、積極的な仕事態度を持つのが最も重要です、仕事の中では、会社のために利益を作り出しただけでなく、同時自分の能力にも高めることもできます。仕事経験のない私は、経験を積み重ねるために更に多くのことをすべきです。特に今のインターンシップは正社員のように明確な仕事範囲を持っていないので、積極的さが足りなければ、何をすれば分からない時はあるかもしれない。だから、経験を積み重ね、能力を向上できるために、普通は積極的に自分ができることを探すことが必要です。

▶ 後輩に伝えたいこと

・一人で仕事を完成するよりは、チームが一つのプロジェクトを完成し、仕事の中でチームの他の同僚とのコミュニケーションをどう守るかもかなり大切ですが、仕事中、自分の役割を真面目に担当しましょう。
・学生として、クラスメイト、先生、親に直面する一方、社会人になった後更に複雑な関係に直面しますから、礼儀、言葉遣いや人に対する態度をきちんと注意しましょう。

▶ かかった経費

交通費：8,000円/月
食事代：1,000円/日程度

長期学外学修プログラム

令和元年度報告書

発行日：令和２年12月１日

発　行：文化学園大学 USR推進室
〒151-8523　渋谷区代々木3-22-1
03(3299)2019

編　集：松田祐之（服装社会学研究室）
工藤雅人（服装社会学研究室）
孟軼儒（USR推進室）

文化学園大学

Bunka Gakuen University